

# Oracle8i

for Intel UNIX (DG/UX Intel, SCO UnixWare, Solaris Intel) インストレーション・ガイド

リリース 8.1.5

おもなトピック：  
システム要件  
環境設定  
インストレーション  
Oracle8i の構成  
各国語サポート

**ORACLE**

---

Oracle8i for Intel UNIX (DG/UX Intel, SCO UnixWare, Solaris Intel) インストール・ガイド  
リリース 8.1.5

部品番号: J00077-01

第 1 版: 1999 年 9 月 (第 1 刷)

原本名: Oracle8i Installation Guide, Release 8.1.5 for Intel UNIX (DG/UX Intel, SCO UnixWare, Solaris Intel)

原本部品番号: A69364-01

原本著者: Reiko Nishi

原本協力者: Dong Chang, Pauline Hoi, Eugene Karichkin, Sharad Lal

Copyright © 1996, 1999, Oracle Corporation. All rights reserved.

Printed in Japan.

制限付権利の説明

プログラムの使用、複製または開示は、オラクル社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権に関する法律により保護されています。

当ソフトウェア（プログラム）のリバース・エンジニアリングは禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更されることがあります。オラクル社は本ドキュメントの無謬性を保証しません。

\* オラクル社とは、Oracle Corporation（米国オラクル）または日本オラクル株式会社（日本オラクル）を指します。

危険な用途への使用について

オラクル社製品は、原子力、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションを用途として開発されておりません。オラクル社製品を上述のようなアプリケーションに使用することについての安全確保は、顧客各位の責任と費用により行ってください。万一かかる用途での使用によりクレームや損害が発生いたしましても、日本オラクル株式会社と開発元である Oracle Corporation（米国オラクル）およびその関連会社は一切責任を負いかねます。当プログラムを米国国防総省の米国政府機関に提供する際には、『Restricted Rights』と共に提供してください。この場合次の Legend が適用されます。

Restricted Rights Legend

Programs delivered subject to the DOD FAR Supplement are "commercial computer software" and use, duplication and disclosure of the Programs shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement. Otherwise, Programs delivered subject to the Federal Acquisition Regulations are "restricted computer software" and use, duplication and disclosure of the Programs shall be subject to the restrictions in FAR 52.227-14, Rights in Data -- General, including Alternate III (June 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このドキュメントに記載されているその他の会社名および製品名は、あくまでその製品および会社を識別する目的にのみ使用されており、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

---

# 目次

はじめに .....	v
用途 .....	v
対象読者 .....	v
Oracle8i および Oracle8i Enterprise Edition .....	v
このマニュアルで使用する表記規則 .....	vi
コマンドの構文 .....	vi
参照マニュアル .....	vii
オラクル社のサービスおよびサポート .....	vii
<b>1 システム要件</b>	
インストールの概要 .....	1-2
システム要件 .....	1-2
ハードウェア要件 .....	1-2
ディスク領域要件 .....	1-4
オペレーティング・システム・ソフトウェア要件 .....	1-5
オンライン・ドキュメントの要件 .....	1-7
その他の製品固有の要件 .....	1-8
<b>Intel UNIX およびインストールに固有の問題点および制限事項</b> .....	1-12
新しい ORACLE_HOME .....	1-13
Java Runtime Environment (JRE) .....	1-13
キャラクタ・モード .....	1-13
アップグレードおよび移行 .....	1-13
Oracle7 からの移行 .....	1-14
ファイル・システム .....	1-14
最適フレキシブル・アーキテクチャ .....	1-14

サイズが大きなファイル .....	1-14
マルチスレッド・サーバー .....	1-15
DG AviiON システムのパフォーマンス機能 .....	1-15
新製品 .....	1-15
Oracle7 から Oracle8 .....	1-15
Oracle8 から Oracle8i .....	1-16

## 2 環境設定

UNIX 環境の設定 .....	2-2
root ユーザーで行う設定タスク .....	2-11
oracle ユーザーで行う設定タスク .....	2-16
Oracle 製品の設定タスク .....	2-18
Oracle8i オプション .....	2-19
Tools およびプリコンパイラ .....	2-20
ネットワーク製品およびシステム管理製品 .....	2-21

## 3 インストール

製品のインストール・カテゴリおよびインストール・タイプ .....	3-2
OUI の起動 .....	3-4
初回の製品インストール .....	3-6
初回インストール後の追加製品のインストール .....	3-6
製品の再インストール .....	3-7
Oracle Parallel Server の再インストール .....	3-7
データベースの作成 .....	3-7
既存システムのアップグレードまたは移行 .....	3-8
Oracle ソフトウェアの削除 .....	3-8
インストール失敗後の対処 .....	3-8
Oracle Parallel Server のインストール .....	3-9
非問合せモードでのインストール .....	3-9
レスポンス・ファイルの準備 .....	3-9
Oracle Universal Installer に対するレスポンス・ファイルの指定 .....	3-9
エラー処理 .....	3-10
レスポンス・ファイルからの値の有効性のチェック .....	3-10

## 4 Oracle8i の構成

root ユーザーで行う構成タスク .....	4-2
oracle ユーザーで行う構成タスク .....	4-7
Oracle 製品のインストール後のタスク .....	4-12
インストールしたドキュメントの表示 .....	4-19
Oracle Information Navigator .....	4-20

## A 各国語サポート

サポートしているソート順 .....	A-2
サポートしているキャラクタ・セット .....	A-2
サポートしている言語および地域 .....	A-5

## 索引



---

# はじめに

## 用途

このマニュアルおよび『Oracle8i for Intel UNIX (DG/UX Intel, SCO UnixWare, Solaris Intel) 管理者リファレンス』は、Intel UNIX での Oracle8i のインストールおよび構成方法を記載しています。製品情報は、ご使用の Oracle8i ドキュメンテーション・ライブラリ・セットに記載されています。

## 対象読者

このマニュアルは、Intel UNIX システムに Oracle8i をインストールする方を対象としています。

## Oracle8i および Oracle8i Enterprise Edition

特に指示がない限り、このマニュアルで説明している特長や機能は、Oracle8i および Oracle8i Enterprise Edition に共通です。

## このマニュアルで使用する表記規則

クーリエ体	クーリエ体は、UNIX コマンド、ディレクトリ名、ユーザー名、パス名およびファイル名を表します。
大カッコ []	大カッコで囲まれた語は、キーの名前を表します（たとえば、[Return] を押す）。ただし、コマンド構文で大カッコを使用する場合は意味が異なります。
イタリック体	イタリック体は、変数（ファイル名の中で変化する部分を含む）を表します。
大文字	大文字は、SQL コマンド、初期化パラメータおよび環境変数を表します。

UNIX では大文字と小文字が区別されるため、このマニュアルの表記規則は、他の Oracle 製品のマニュアルで使用されている表記規則と多少異なります。

## コマンドの構文

コマンドの構文は、クーリエ体で表します。コマンドの構文の表記規則は次のとおりです。

バックスラッシュ \	バックスラッシュは、1 行にコマンドが入りきらない場合に使用します。このマニュアルで記載しているとおりに入力する（バックスラッシュを付ける）か、またはバックスラッシュを付けずに 1 行で入力します。 <pre>dd if=/dev/rdsd/c0t1d0s6 of=/dev/rst0 bs=10b \ count=10000</pre>
中カッコ {}	中カッコは、必ず選択する項目を表します。 <pre>.DEFINE {macro1}</pre>
大カッコ []	大カッコは、任意に選択する項目を表します。 <pre>cvtcrt termname [outfile]</pre> <p>ただし、本文で大カッコを使用する場合は意味が異なります。</p>
省略記号 ...	省略記号は、同じ項目を任意の回数だけ繰り返すことを表します。 <pre>CHKVAL fieldname value1 value2 ... valueN</pre>
イタリック体	イタリック体は、変数を表します。変数の箇所を適切な値に置き換えてください。 <pre>library_name</pre>
縦棒線	縦棒線は、中カッコまたは大カッコで囲まれている選択項目を表します。 <pre>SIZE filesize [K M]</pre>



## 参照マニュアル

前回のリリースの Oracle Server からの移行およびアップグレードの詳細は、『Oracle8i 移行ガイド』を参照してください。

本番データベース・システム用のシステム管理およびチューニングの詳細は、次のマニュアルを参照してください。

- 『Oracle8i for Intel UNIX (DG/UX Intel, SCO UnixWare, Solaris Intel) 管理者リファレンス』
- 『Oracle8i チューニング』
- 『Oracle8i 管理者ガイド』
- 『Oracle8i Net8 管理者ガイド』

リレーショナル・データベース管理システム関連の概念または用語に慣れていない場合は、インストレーションを始める前に、『Oracle8i 概要』の第 1 章をお読みください。

## オラクル社のサービスおよびサポート

Oracle 製品およびグローバル・サービスの詳細は、インターネットの <http://www.oracle.com> を参照してください。

ここでは、選択されたサービスの URL を記載しています。

### オラクル社カスタマ・サポート・センター

テクニカル・サポート情報は、<http://www.oracle.com/support> に一覧で記載されています。テンプレートをご使用になると、電話をかける前に、問題に関する情報を用意することができます。CSI 番号（該当する場合）、または詳しい連絡先情報（特別なプロジェクト情報がある場合は、それも含む）も必要です。

### 教育およびトレーニング

トレーニング情報およびスケジュールは、<http://education.oracle.com> から参照できます。



# 1

---

## システム要件

インストールを短時間で正常に終了するためには、Oracle ソフトウェアをインストールするためのソフトウェアの依存関係および領域要件を、ローカル・システムが満たしている必要があります。この章では、Intel UNIX に Oracle8i をインストールする場合の要件と、このリリースの制限事項を説明します。インストールを始める前に、この章で説明する要件をシステムが満たしていることを確認してください。

- インストールの概要
- システム要件
- Intel UNIX およびインストールに固有の問題点および制限事項
- 新製品

## インストールシヨンの概要

Oracle8i をインストールする手順は、次のとおりです。

1. 前提条件を満たす : ハードウェア、ソフトウェア、メモリーおよびディスク領域が、インストールする製品の要件を満たしていることを確認します。要件および制限事項は、この章に記述しています。
2. UNIX 環境を確認する : インストールする製品用に UNIX 環境が正しく設定されていることを確認します。詳細は、このマニュアルの第 2 章「環境設定」を参照してください。
3. インストールする : CD-ROM で提供されている新規の Oracle Universal Installer を使用して、Oracle ソフトウェアをインストールします。詳細は、このマニュアルの第 3 章「インストール」を参照してください。
4. インストール後のタスクを行う : データベース・オブジェクトを作成してユーザー環境を構築し、インストールした Oracle 製品をローカル・システム用に構成します。詳細は、このマニュアルの第 4 章「Oracle8i の構成」を参照してください。
5. クライアント・インストールを行う : Oracle Client Tools、アプリケーションおよびクライアント・インタフェースをインストールする場合は、それぞれのインストール・ガイドに記述されている要件および指示を確認します。

## システム要件

Oracle 製品をインストールする前に、システムが次の要件を満たしていることを確認してください。

### ハードウェア要件

Oracle8i for Intel UNIX (DG/UX Intel, SCO UnixWare, Solaris Intel) リリース 8.1.5 には次のハードウェアが必要です。

表 1-1 DG/UX Intel のハードウェア要件

ハードウェア項目	DG/UX Intel の要件
CPU	Intel チップ・セット・ベースの DG AviiON Server が必要です。
メモリー	32MB 以上の RAM をお勧めします。interMedia Text を使用する場合は、128MB をお勧めします。
スワップ領域	通常は、RAM の 3 倍の領域が必要です。
ディスク領域	<p>Oracle8i 配布をすべてインストールする場合は、750MB 以上が必要です。製品のサブセットだけをインストールする場合、必要な領域は小さくなります。OFA 準拠のモデルを使用する場合は、4 つ以上のデバイスが必要です。1 つは Oracle ソフトウェア配布用、3 つ以上は OFA 準拠のデータベース作成用です。</p> <p><b>注意：</b>パフォーマンスおよびフォルト・トレランスを向上させるために、ディスク領域を、少数の大きなドライブではなく、多数の小さなドライブに分散することをお勧めします。</p>
CD-ROM 装置	High Sierra-RockRidge 形式を読み取れる CD-ROM 装置が必要です。

表 1-2 SCO UnixWare のハードウェア要件

ハードウェア項目	SCO UnixWare の要件
CPU	Intel ベースのシステムが必要です。サポートされているハードウェア・システムについては、SCO UnixWare のドキュメントを参照してください。
メモリー	32MB 以上の RAM をお勧めします。interMedia Text を使用する場合は、128MB をお勧めします。
スワップ領域	通常は、RAM の 3 倍の領域が必要です。
ディスク領域	<p>Oracle8i 配布をすべてインストールする場合は、750MB 以上が必要です。製品のサブセットだけをインストールする場合、必要な領域は小さくなります。OFA 準拠のモデルを使用する場合は、4 つ以上のデバイスが必要です。1 つは Oracle ソフトウェア配布用、3 つ以上は OFA 準拠のデータベース作成用です。</p> <p><b>注意：</b>パフォーマンスおよびフォルト・トレランスを向上させるために、ディスク領域を、少数の大きなドライブではなく、多数の小さなドライブに分散することをお勧めします。</p>
CD-ROM 装置	SCO UnixWare がサポートしている RockRidge 形式の CD-ROM ドライブが必要です。
イーサネット・コントローラ	SCO UnixWare がサポートしているイーサネット・カードが必要です。

表 1-3 Solaris Intel のハードウェア要件

ハードウェア項目	Solaris Intel の要件
CPU	Intel ベースのシステムが必要です。サポートされているハードウェア・システムについては、Solaris Intel のドキュメントを参照してください。
メモリー	32MB 以上の RAM をお勧めします。interMedia Text を使用する場合は、128MB をお勧めします。
ディスク領域	<p>Oracle8i 配布をすべてインストールする場合は、750MB 以上が必要です。製品のサブセットだけをインストールする場合、必要な領域は小さくなります。OFA 準拠のモデルを使用する場合は、4 つ以上のドライブが必要です。1 つは Oracle ソフトウェア配布用、3 つ以上は OFA 準拠のデータベース作成用です。</p> <p><b>注意：</b>パフォーマンスおよびフォルト・トレランスを向上させるために、ディスク領域を、少数の大きなドライブではなく、多数の小さなドライブに分散することをお勧めします。</p>
CD-ROM 装置	Solaris Intel がサポートしている RockRidge 形式の CD-ROM ドライブが必要です。
イーサネット・コントローラ	Solaris Intel がサポートしているイーサネット・カードが必要です。

## ディスク領域要件

Oracle Universal Installer (OUI) を使用すると、3-2 ページの「製品のインストール・カテゴリおよびインストール・タイプ」に説明されている、インストール・カテゴリおよびインストール・タイプを選択できます。選択すると、表 1-4 に示されている必要なディスク領域のサイズが確認できます。Custom インストールを行うには、Minimal インストールを行うときよりも大きなディスク領域が必要です。ディスク領域要件には、データベースのサイズは含まれていません。また、64MB の RAM は、今回リリースの製品を実行するために最低限必要な量です。多数のユーザーをサポートする本番 RDBMS では、これ以上のディスク領域およびメモリーが必要です。

表 1-4 インストールを行うためのディスク領域要件

	Oracle8i Enterprise Edition	Oracle8i Client	Oracle Programmer
Minimal	660MB	N/A	N/A
Typical	811MB	306MB	276MB
Custom	Custom インストールを行うには、Minimal インストールを行うときよりも大きなディスク領域が必要です。		
注意：前述の数字はおおよその値であり、インストール時によって異なります。			

## オペレーティング・システム・ソフトウェア要件

Oracle8i for Intel UNIX (DG/UX Intel, SCO UnixWare, Solaris Intel) リリース 8.1.5 には次のソフトウェアが必要です。

表 1-5 DG/UX Intel のオペレーティング・システム要件

ソフトウェア項目	DG/UX Intel の要件
オペレーティング・システム	SDK および ACO オプションが付いている DG/UX リリース 4.20 MU03 SDK および ACO オプションが付いている DG/UX リリース 4.20 MU04
オペレーティング・システム・パッチ	DG/UX リリース 4.20 MU03 用 : dgux.acl_R4.20 MU03_ix86.p01 dgux.man_R4.20 MU03_ix86.p01 dgux_R4.20 MU03_ix86.p05 dgux_R4.20 MU03_ix86.p50 dgux_R4.20 MU03_ix86.p60 dgux_R4.20 MU03_ix86.p80 dgux_R4.20 MU03_ix86.p41 tcpip_R4.20 MU03_ix86.p13  DG/UX リリース 4.20 MU04 用 : dgux_R4.20 MU04_ix86.p04
GUI 要件	リリースの X11R5 が必要です。
クラスタ・パッケージ	Oracle Parallel Server を使用するには、DG Cluster 1.23 から分散ロック・マネージャをインストールする必要があります。Cluster 1.23 は DG/UX リリース 4.20 MU03 上にインストールする必要があるため、注意してください。
UNIX カーネル・パラメータ	DG/UX Intel の UNIX カーネル・パラメータの推奨値は、第 2 章の表 2-2 「DG/UX Intel の UNIX 環境の設定」を参照してください。Oracle Parallel Server を使用する目的、DG Cluster 1.24 のサポート予定については、オラクル社カスタマ・サポートにお問い合わせください。

表 1-6 SCO UnixWare のオペレーティング・システム要件

ソフトウェア項目	SCO UnixWare の要件
オペレーティング・システム	UnixWare7 Server 7.1 が必要です。Optimizing C コンパイル・システムが必要です。
オペレーティング・システム・パッチ	SCO UnixWare OS パッチについては、『Oracle8i for Intel UNIX (DG/UX Intel, SCO UnixWare, Solaris Intel) リリース・ノート』を参照してください。
GUI 要件	リリースの X11R6 が必要です。
UNIX カーネル・パラメータ	SCO UnixWare UNIX カーネル・パラメータの推奨値については、このマニュアルの第 2 章を参照してください。
ULIMIT 値	<code>/etc/default/login</code> ファイルの <code>ULIMIT</code> パラメータに、ご使用の最も大きいデータベース・ファイルよりも大きい値が設定されていることを確認してください。カーネルの <code>ULIMIT</code> パラメータの値が、ご使用のシステムに適切な値に設定されていないと、いくつかのファイルが使用できなくなるか、または破損してしまうことがあります。 ULIMIT 値は、インストール用に 2113674 ブロック以上に設定することをお薦めします。このパラメータの設定方法については、ご使用のオペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。
非同期 I/O パッケージ	SCO UnixWare カーネルとともに出荷された非同期 I/O パッケージが、ご使用のシステムにインストールされていることを確認してください。 UnixWare7 については、Oracle の所有者に <code>/dev/async</code> への書込み権限があることを確認してください。 <code>/etc/conf/node.d/async</code> ファイルを (man モードを参照して) 指示に従って変更してください。



表 1-7 Solaris Intel のオペレーティング・システム要件

ソフトウェア項目	Solaris Intel の要件
オペレーティング・システム	Solaris 7 for Intel が必要です。C コンパイラは、インストールには必要ありませんが、C のデモ・プログラムをコンパイルする場合は必要です。
オペレーティング・システム・パッチ	パッチ 106328-04 パッチ 107440-01
ULIMIT 値の削除	Oracle8i をインストールする前に、/etc/default/login ファイルから ULIMIT の値を含む行を削除する必要があります。 /etc/default/login の ULIMIT のデフォルト値では、Oracle8i をインストールできません。
GUI 要件	Solaris にバンドルされている Motif ランタイム・キットのパッケージ SUNWmfrun がインストールされている必要があります。
UNIX カーネル・パラメータの再構成	Oracle8i をインストールする前に、UNIX カーネルを再構成する必要があります。デフォルトの UNIX カーネルでは、Oracle8i をインストールできません。Solaris Intel カーネル・パラメータの推奨値は、第 2 章の表 2-5 「Solaris Intel の UNIX 環境の設定」を参照してください。

現在のオペレーティング・システム情報を確認するには、次のコマンドを入力します。

DG/UX Intel の場合

```
$ /usr/sbin/dg_sysreport -g dgux
```

SCO UnixWare の場合

```
$ pkginfo
```

Solaris Intel の場合

```
$ pkginfo
```

Solaris Intel でオペレーティング・システムに適用されているパッチを表示するには、次のコマンドを入力します。

```
$ showrev -p
```

## オンライン・ドキュメントの要件

オンライン・ドキュメントを表示するには、Web ブラウザが必要です。Netscape Navigator 4.0 または Microsoft Internet Explorer 4.0 以上の Web ブラウザをお薦めします。

## その他の製品固有の要件

この項では、前述のハードウェアおよびソフトウェア要件以外のその他の製品固有の情報を説明します。

### Oracle8i オプション

表 1-8 Oracle8i およびオプションの制限事項、要件およびインストールに必要なタスク (DG/UX Intel の場合)

製品名	DG/UX Intel の制限事項および要件
Oracle8i 8.1.5	なし
Oracle Programmer 8.1.5	なし
Oracle Parallel Server 8.1.5	Oracle Enterprise Edition だけで使用可能です。 Oracle Parallel Server には、DG Cluster 1.23 が必要です。
Oracle Partitioning 8.1.5	なし
Oracle <i>interMedia</i> 8.1.5 (Audio、Text、Video、Locator および Image を含む) (以前は ConText)	なし

表 1-9 Oracle8i およびオプションの制限事項、要件およびインストールに必要なタスク (SCO UnixWare の場合)

製品名	SCO UnixWare の制限事項および要件
Oracle8i 8.1.5	なし
Oracle Programmer 8.1.5	なし
Oracle Parallel Server 8.1.5	OPS は SCO UnixWare ではサポートされていません。
Oracle Partitioning 8.1.5	なし
Oracle <i>interMedia</i> 8.1.5 (Audio、Text、Video、Locator および Image を含む) (以前は ConText)	なし

表 1-10 Oracle8i およびオプションの制限事項、要件およびインストールに必要なタスク  
(Solaris Intel の場合)

製品名	Solaris Intel の制限事項および要件
Oracle8i 8.1.5	なし
Oracle Programmer 8.1.5	なし
Oracle Parallel Server 8.1.5	OPS は Solaris Intel ではサポートされていません。
Oracle Partitioning 8.1.5	なし
Oracle <i>interMedia</i> 8.1.5 (Audio、Text、Video、Locator および Image を含む) (以前は ConText)	なし

## Tools およびプリコンパイラ

表 1-11 Tools およびプリコンパイラ製品の制限事項、要件およびインストールに必要なタスク

製品名	制限事項および要件
Oracle Data Migration Assistant 8.1.5	ODMA を使用して移行するには、Oracle7 データベースはリリース 7.1.4 以上が必要です。ODMA を使用してアップグレードするには、Oracle8 データベースはリリース 8.0.3.0 以上が必要です。
Oracle Database Configuration Assistant 8.1.5	なし
Object Type Translator 8.1.5	なし
Oracle Call Interface 8.1.5	なし
Oracle Universal Installer 1.6.0.7	OUI 使用中は、2 つの端末ウィンドウをオープンにしたままにしなければなりません。
Pro*COBOL 8.1.5	DG/UX Intel の場合、MicroFocus COBOL 4.0 が必要です。 SCO UnixWare の場合、Micro Focus COBOL 4.1 以上が必要です。
Pro*C/C++ 8.1.5	DG/UX Intel の場合、Edinburgh Portable Compiler C++ 5.0 が必要です。 SCO UnixWare の場合、UDK Optimizing C コンパイル・システム 7 および UDK C++ コンパイル・システム 7.1 が必要です。 Solaris Intel の場合、Solaris Intel Workshop 5.0 の C コンパイル・システム、および Solaris Intel Workshop 4.2 の C++ コンパイル・システムが必要です。
Pro*COBOL 1.8.50	DG/UX Intel の場合、Micro Focus COBOL 4.0 以上が必要です。 SCO UnixWare の場合、Micro Focus COBOL 4.1 が必要です。
Oracle JServer 8.1.5 (JRE、JVM および Java ユーティリティを含む)	制限事項および要件は、製品の CD-ROM にある Java README を参照してください。
Pro*FORTRAN 1.8.50	DG/UX Intel の場合、Edinburgh Portable Compilers FORTRAN77 V2.7 が必要です。
Oracle JDBC Drivers	なし
JDK version for JDBC Drivers	JDK 1.1.7 が必要です。
Oracle SQLJ 8.1.5	なし
SQL*Plus 8.1.5	なし

## ネットワーク製品およびシステム管理製品

すべてのネットワーク製品には、サポートされたネットワークの基盤となるソフトウェアおよびオペレーティング・システム・ライブラリが必要です。Net8 製品をインストールする前に、ネットワーク・ソフトウェアをインストールおよび実行してください。詳細は、オペレーティング・システムおよび他社のネットワーク製品のドキュメントを参照してください。Net8 製品には、今回のリリースで提供される固有リリースの Oracle8i および Net8 が必要です。

表 1-12 ネットワークおよびシステム管理製品の制限事項、要件およびインストールに必要なタスク

製品名	制限事項および要件
Oracle Advanced Security:Export Version 8.1.5	詳細は、表 1-13 「OAS がサポートしている認証方式および要件」を参照してください。
Oracle Intelligent Agent 8.1.5	なし
Oracle Names 8.1.5	なし
Net8 8.1.5	JDK リリース 1.1.7 が必要です。
Oracle SPX/IPX Protocol 8.1.5	ソフトウェア：Netware for UnixWare 7 が必要です。 Netware 3.10 for DG/UX R4.20 付きの Netware Transport for AviiON Systems R3.0 が必要です。 Netware Service for AViiON Systems R3.0 (オプション)。 TotalNET Advanced Server 5.2 for Solaris7 の Netware が必要です。
Oracle Connection Manager 8.1.5	なし
Oracle TCP/IP Protocol 8.1.5	ハードウェア：イーサネット接続が必要です。
Oracle SSL Protocol 8.1.5	なし

## 透過的にインストールされる製品

Oracle8i をインストールすると同時に、一部の製品が自動的にインストールされます。これらの製品は、前回のリリースで他に依存しない製品として表示されていた場合でも、インストールされた製品の一覧には表示されません。

- PL/SQL 8.1.5
- Oracle Database Utilities 8.1.5
- Oracle Objects 8.1.5
- Migration Utility 8.1.5
- Server Manager 8.1.5

Oracle Intelligent Agent は、Oracle Data Gatherer を自動的にインストールします。

Oracle Parallel Server は、Oracle Parallel Server Management を自動的にインストールします（DG/UX Intel の場合）。

Oracle Advanced Security は、SSL Protocol Support および Oracle Wallet Manager を自動的にインストールします。

### Oracle Advanced Security

表 1-13 に、Oracle Advanced Security（OAS）がサポートしている認証プロトコルの要件を示します。

表 1-13 OAS がサポートしている認証方式および要件

認証方式	要件
Kerberos	Kerberos バージョン 5 リリース 1.0 以上が必要です。
SecurID	ACE/Server リリース 1.2.4 以上、および Security Dynamics の SecurID カードが必要です。
Identix	Oracle Biometrix リリース 1.2.4 以上が必要です。
RADIUS	Livingston RADIUS 標準に準拠した RADIUS サーバーが必要です。必要な Java システム固有のスレッドは、JRE の一部としてインストールされます。
Secure Socket Layer	なし

**注意：** その他の認証プロトコルのソフトウェアに、Oracle 製品を再リンクする必要はありません。ただし、Oracle は Kerberos または SecurID の認証サーバーを提供していません。そのため、プロトコルに有効な認証サーバーを個別にインストールおよび構成する必要があります。Secure Socket Layer は、Oracle Advanced Security に含まれていて、Oracle Advanced Security がインストールされると同時にインストールされます。

## Intel UNIX およびインストールに固有の問題点および制限事項

Intel UNIX に Oracle8i をインストールして使用する場合、次の問題点および制限事項があります。Oracle8i を使用する前に、今回のリリースに付属のリリース・ノート、および \$ORACLE\_HOME/rdbms/doc ディレクトリにある README ファイルを参照してください。リリース 8.1.5 の場合、README ファイルは圧縮解除され、doc ディレクトリ配下の一番上のレベルの HTML ファイルにリンクされています。Oracle8i 配布に含まれる他の製品の README ファイルは、各製品の doc または admin/doc ディレクトリに保存されています。

## 新しい ORACLE\_HOME

8.1.5 より前 (8.1.3 または 8.1.4 を含む) の Oracle ソフトウェアが、すでに ORACLE\_HOME ディレクトリにインストールされている場合、その ORACLE\_HOME ディレクトリに Oracle8i リリース 8.1.5 をインストールしてはいけません。

## Java Runtime Environment (JRE)

Oracle8i と同時に出荷される JRE は、オラクル社の Java アプリケーション (OUI、Database Configuration Assistant (DBCA)、Net8 Assistant など) によって使用されます。これらの Java アプリケーションを実行するためにサポートされているのは、オラクル社の JRE のみです。また、これらのアプリケーションはオラクル社の JRE を使用します。

オラクル社カスタマ・サポート・センターによって提供されるパッチ以外では、この JRE を変更しないでください。

JRE は、OUI がインストールされると同時に Oracle Inventory にインストールされます。Inventory には、複数バージョンの JRE をインストールできます。それぞれの Inventory は、1 つ以上の製品またはリリースによって使用されます。ORACLE\_HOME にある製品は、\$ORACLE\_HOME/JRE から Inventory 内にある JRE の実際の位置へ、シンボリック・リンクを経由して JRE にアクセスします。

オラクル社カスタマ・サポート・センターによって提供されるパッチ以外では、シンボリック・リンクを変更しないでください。

## キャラクタ・モード

キャラクタ・モードを使用したインストールは行えません。ただし、OUI を構成して、Oracle 製品の非問合せインストールを実行することはできます。非問合せモードの OUI は、マシンのコンソール (X-windows 環境) から直接実行できます。また、X 端末エミュレータ経由で実行することもできます。Oracle 製品の非問合せインストールの詳細は、第 3 章の「非問合せモードでのインストール」を参照してください。

## アップグレードおよび移行

既存システムをアップグレードする場合、このマニュアルに説明されていない問題が発生する場合があります。製品のアップグレードおよび移行の詳細は、『Oracle8i 移行ガイド』を参照してください。

## Oracle7 からの移行

今回のリリースには、Oracle Data Migration Assistant (ODMA) が含まれています。ODMA を使用すると、リリース 7.1.4 以上の Oracle7 データベースを最新の Oracle8i リリースに移行できます。また、リリース 8.0.3 以上の Oracle8 データベースを最新の Oracle8i リリースにアップグレードできます。リリース 7.1.4 より前の Oracle7 データベースを移行するには、最初に Oracle7 データベースをリリース 7.1.4 以上へアップグレードした後で、ODMA を使用して Oracle8i へ移行する必要があります。

---

**注意：** Migration Utility は、スタンドアロン製品として使用できます。DG/UX Intel システムで、リリース 7.3.4 の Oracle7 データベースを Oracle8i に移行する場合は、Oracle7 環境にリスナー・パッチ (Bug#619509) を適用する必要があります。詳細は、patch\_bug619509 ディレクトリ下の README ファイルに記載されたインストール手順を参照してください。

---

## ファイル・システム

Oracle Server は、ファイルがディスクに書き込まれたことを確認できなければなりません。この確認機能がサポートされていないファイル・システムは、Oracle ソフトウェアをインストールできても、Oracle データベースと併用できません。

## 最適フレキシブル・アーキテクチャ

最適フレキシブル・アーキテクチャ (OFA) は OUI によってサポートされていますが、必ず実行されるわけではありません。OUI の「Installation Types」ダイアログ・ボックスで「Typical」オプションを選択した場合に、デフォルトでインストールされるデモンストレーション・データベースは、シングル・マウント・ポイントの下に作成されます。

**参照：** OFA の詳細は、『Oracle8i for Intel UNIX (DG/UX Intel, SCO UnixWare, Solaris Intel) 管理者リファレンス』の付録 A「最適フレキシブル・アーキテクチャ」を参照してください。

## サイズが大きなファイル

Oracle8i では、32 ビットおよび 64 ビットのいずれのリリースでも、2GB を超える大きなサイズのファイルが扱えます。Intel UNIX でも大きなサイズのファイルを扱えますが、ファイル・システムおよびボリューム・マネージャにファイル・サイズ制限がないことを確認する必要があります。System V ファイル・システムには、2GB までしか扱えないものがあります。

制限があるかどうかを判断するために、シェルも確認します。シェルの制限事項を確認するには、`ulimit -Sa` と入力します。ハードウェアの制限事項を確認するには、`ulimit -Ha` と入力します。



たとえば、file (blocks) が 2097148 と設定されている場合、作成できるファイルの最大サイズは、1GB です。

## マルチスレッド・サーバー

リリース 8.1.5 の Oracle8i for Intel UNIX (DG/UX Intel, SCO UnixWare, Solaris Intel) は、マルチスレッド・サーバーをサポートしています。

## DG AviiON システムのパフォーマンス機能

間接データベース・バッファ機能により、Oracle SGA はシングル・プロセスのメモリ制限を超えて大きくすることができます。『Oracle8i for Intel UNIX (DG/UX Intel, SCO UnixWare, Solaris Intel) 管理者ガイド』の第 2 章の「DG システムでの間接データベース・バッファ」の項を参照してください。

次の改善により、リリース 8.0.4 から設けられた DG NUMA システムのパフォーマンスが向上しています。

- DG NUMA システムで Oracle Parallel Server がサポートされています。
- 最適なデータベース・パフォーマンスのため、すべての NUMA ブロックにわたるデータベース・バッファが垂直ストライプ化されています。
- 最適なデータベース・パフォーマンスのため、Oracle SGA (データベース・バッファを除く) が水平ストライプ化されています。
- ホスト・ベース・アプリケーションの最適なパフォーマンスのため、クライアントとサーバーが同じ NUMA ブロックに付加されています。

---

**注意：** I/O スレーブは間接バッファに結合して使用することはできません。

---

## 新製品

ここでは、新製品名、および前回の Oracle Server リリースから変更された製品名を記述します。

### Oracle7 から Oracle8

#### 新製品

**Connection Manager** Connection Manager は、Oracle Net8 製品の一部です。複数のネットワーク・プロトコル (Multi-Protocol Interchange の代替)、Oracle Server のアクセス管理、サーバーおよびクライアント間のセッション集中をサポートしています。

**Image Cartridge** Image Cartridge は、Oracle8 Server に対する拡張機能で、イメージ記憶域、検索、およびオブジェクト・データ型を介した形式変換機能が提供されます。このカートリッジは、バイナリ・ラージ・オブジェクト (BLOB) を使用したイメージ記憶領域をサポートしており、外部ファイル (BFILE) のイメージ・データを参照します。

**Object Type Translator** Object Type Translator は、オブジェクト型および指定されたコレクション型のデータベース定義を、OCI または Pro\*C/C++ アプリケーションに含まれている C 構造宣言に変換します。

**Oracle Security Server** Oracle Security Server は、公開鍵暗号をベースにしています。また、認証および Oracle ネットワーク環境での権限をサポートしています。

**Recovery Manager** Recovery Manager は、バックアップ、復元および回復機能を Oracle8 Server に統合します。Enterprise Backup Utility の後継製品です。

### 変更された製品

**Oracle Net8** SQL\*Net の後継製品で、ネットワーク通信を可能にします。

## Oracle8 から Oracle8i

ここでは、新製品名、および今回のリリースで変更された製品名を記述および定義します。

### 新製品

**Oracle Partitioning** Oracle Partitioning を使用すると、表のサブセットに管理機能が提供され、管理表および索引をさらに制御できます。

**Java Runtime Environment 1.1.7** Oracle8i リリース 8.1.5 とともに出荷される JRE は、Java プログラムを実行するための最小標準 Java プラットフォームです。この JRE には、Java Virtual Machine、Java コア・クラスおよびサポート・ファイルが含まれています。

**Oracle Database Configuration Assistant** Oracle Database Configuration Assistant は、データベースの作成、変更または削除を行うプロセスを自動化します。

**Oracle Data Migration Assistant** Oracle Data Migration Assistant は、Oracle7 または Oracle8 データベースから Oracle8i への移行を自動化します。

**Oracle JServer および Oracle JServer Enterprise Edition** JServer は、Java Virtual Machine、CORBA ORB、埋込み JDBC ドライバ、SQLJ トランスレータおよび Enterprise JavaBeans トランザクション・サーバーを提供します。Oracle JServer は、個別にライセンスされています。

**Oracle Universal Installer** Oracle 製品をインストールする Java アプリケーションです。

**Oracle *interMedia*** Oracle *interMedia* を使用すると、Text、Document、Image、Audio および Video を他の企業データと統合的に管理できます。また、インターネット、電子商取引、メディアリッチ・アプリケーションのテキストおよびマルチメディア・コンテンツに対する、Oracle の信頼性、可用性およびデータ管理機能を拡張します。

**Oracle *interMedia* Locator Service** Oracle *interMedia* Locator Service を使用すると、空間データの保存および問合せが行えます。

**Oracle JDBC ドライバ** Oracle の Java Database Connectivity Driver を使用すると、Java プログラムは主要な Oracle 製品である Oracle7、Oracle8 および Oracle8i のデータベース・サーバーへアクセスできます。

**Oracle SQLJ** SQLJ は、Java の埋込み SQL 用の新標準です。

## 変更された製品

**Net8 製品** これまでは Oracle Net8 という名称でした。Net8 製品を使用すると、クライアント / サーバー通信およびサーバー / サーバー通信ができます。Oracle Net8 Assistant、Oracle Net8 Client および Oracle Net8 Server に適用されます。

**Oracle Advanced Security** これまでは、Oracle Advanced Networking Option という名称でした。Advanced Security を使用すると、ネットワークのセキュリティおよび認証が拡張されます。Oracle Advanced Security は、個別にライセンスされています。

**Oracle Spatial** これまでは、Oracle8 Spatial Cartridge という名称でした。Oracle Spatial を使用すると、空間データを処理および保存できます。Oracle Spatial は、個別にライセンスされています。

**Oracle Time Series** これまでは、Oracle8 Time Series Cartridge という名称でした。Oracle Time Series を使用すると、オブジェクト・データ型を介してタイム・スタンプ・データを保存および取出しできます。Oracle Time Series は、個別にライセンスされています。

**Oracle Visual Information Retrieval** これまでは、Oracle8 Visual Information Retrieval Cartridge という名称でした。Oracle8 Visual Information Retrieval を使用すると、Image データを保存、取出しおよび処理できます。Oracle8 Visual Information Retrieval は、個別にライセンスされています。

**Oracle Programmer** これまでは、Programmer 2000 という名称でした。Oracle Programmer には、Oracle データベースにアクセスするアプリケーションを作成するための開発ツールおよびインタフェースが含まれています。また、Oracle Programmer には、プリコンパイラ、ネットワーキング・サービス、クライアント・ソフトウェアおよびドキュメントも含まれています。

**Oracle *interMedia* Audio** これまでは、Oracle Audio Cartridge という名称でした。Oracle *interMedia* Audio を使用すると、それぞれのファイル形式でデジタルな Audio データを管理できます。

**Oracle *interMedia* Image** これまでは、Oracle Image Cartridge という名称でした。Oracle *interMedia* Image を使用すると、一般的な形式および業界標準の形式を使用して、Image データを保存、検索および処理できます。

**Oracle *interMedia* Text** これまでは、Oracle ConText Cartridge という名称でした。Oracle *interMedia* Text には、テキスト・データに対して全文検索および高度な言語能力が提供されています。また、標準 SQL および PL/SQL を使用しているさまざまな言語および形式のテキストを、保存、問合せおよび表示することもサポートされています。

**Oracle *interMedia* Video** これまでは、Oracle Video Cartridge という名称でした。Oracle *interMedia* Video を使用すると、ローカル・ソースまたはリモート・ソースから、それぞれの形式の Video データを保存および検索できます。

# 2

---

## 環境設定

この章を参考にして、Oracle8i をインストールする環境を準備します。環境を準備する前に、このマニュアルの第 1 章「システム要件」で説明した要件をシステムが満たすことを確認してください。

- UNIX 環境の設定
- root ユーザーで行う設定タスク
- oracle ユーザーで行う設定タスク
- Oracle 製品の設定タスク

## UNIX 環境の設定

表 2-1、表 2-2、表 2-4 表 2-5 および表 2-3 に、Oracle8i のインストールに必要な環境設定の要件を示します。ご使用のシステムの環境が、記載されている要件のいずれかを満たさない場合は、必要に応じて 2-2 ページに記載されているタスクを行ってください。

表 2-1 DG/UX Intel の UNIX 環境パラメータ

パラメータ	推奨値	説明
NPROC	$20 + (8 \times \text{MAXUSERS})$	プロセスの最大数です。 $20 + (8 \times \text{MAXUSERS})$ の式で、最大 21845 まで設定できます。
PERCENTBUF	SYSTEM DEFAULT	データ・ファイル（プログラム以外のファイル）が占める物理メモリーの割合の最大値です。
SDESLIM	$50 + (\text{データベース・ファイルの総数})$	1 つのプロセスで同時に使用できる記述子の数です。
PERCENT-LOCKABLE	SYSTEM DEFAULT	ユーザー・プロセスがロックできる物理メモリーの割合の最大値です。 <b>注意：</b> Fast Path I/O 機能を使用する場合は、このパラメータの値を大きく設定してください。

表 2-1 DG/UX Intel の UNIX 環境パラメータ

パラメータ	推奨値	説明
セマフォ	SEMMNI	100
	SEMMSL	システムの Oracle データベースの、 <code>initstid.ora</code> ファイルの <code>PROCESSES</code> パラメータの最大値に 10 を加えた値を設定します。
	SEMMNS	<code>PROCESSES</code> パラメータは、 <code>ORACLE_HOME/dbs</code> ディレクトリ下の各 <code>initstid.ora</code> ファイルにあります。リリース 8.1.5 のビルトイン・データベース用の <code>PROCESSES</code> のデフォルト値は、50 です。
	SEMOPM	各 Oracle データベースの <code>PROCESSES</code> パラメータの最大値を除いた合計に、 <code>PROCESSES</code> の最大値の 2 倍と、Oracle データベース数の 10 倍を加えた値を設定します。計算式の例は、2-11 ページの「Oracle8i 用に UNIX カーネルを構成する」を参照してください。

**注意：**前述のカーネル・パラメータが現行の値よりも少ない場合、現行の値を使用してください。この要件は、Oracle8i だけに適用されます。他のプログラムで共有メモリおよびセマフォを使用している場合は、その値に従って調整する必要があります。現行および今後のデータベース要件を計画している場合、カーネルの変更を有効にするためにシステムの再起動が必要であることを考慮してください。

表 2-2 DG/UX Intel の UNIX 環境の設定

環境要因	Oracle8i の要件
マウント・ポイント (記憶デバイス)	Oracle Universal Installer には、2 つのマウント・ポイントが必要です。1 つはソフトウェア用、1 つはデータベース・ファイル用です。OFA 準拠データベースには、ディレクトリ構造の同一レベルにある 4 つ以上のマウント・ポイントが必要です。1 つはソフトウェア用、3 つ以上はデータベース・ファイル用です。
Oracle ロール用の UNIX グループ	UNIX グループには、OSDBA ロールが必要です。このマニュアルでは、グループ名は <code>dba</code> であることを前提としています。OSOPER ロールは、OSDBA と同一のグループまたは異なるグループに属していることがあります。
OUI oraInventory 用の 特別 UNIX グループ	<code>ORACLE_HOME</code> に Oracle をインストールするすべてのユーザーは、同一の UNIX グループに属している必要があります。OUI Inventory は、マシン上のすべての <code>ORACLE_HOME</code> によって共有されています。OUI Inventory のグループは書込み可能です。現行のプライマリ・グループと同様に、 <code>oinstall</code> を使用してインストールすることをお勧めします。

表 2-2 DG/UX Intel の UNIX 環境の設定

環境要因	Oracle8i の要件
UNIX アカウント	Oracle8i システムのインストールおよびアップグレード専用、1 つの UNIX アカウントが必要です。このアカウントは、OSDBA が使用するグループのメンバーである必要があります。
ファイル作成の権限	umask に 022 を設定します。
ORACLE_BASE	必須ではありませんが、OFA 準拠のインストールの一部として設定することをお勧めします。詳細は、2-17 ページの「ORACLE_BASE」を参照してください。

表 2-3 DG/UX Intel の UNIX カーネルの共有メモリー・パラメータ

パラメータ	システム・メモリー構成						
	64MB	128MB	256MB	512MB	1024MB	2048MB	4096MB
SHMMAX	16MB	32MB	64MB	128MB	256MB	512MB	512MB

**注意：** Oracle Parallel Server をインストールするには、SHMMAX の値を 32MB 以上に設定してください。



表 2-4 SCO UnixWare の UNIX 環境の設定

環境要因	Oracle8i の要件	
UNIX カーネル・パラメータ:		
共有メモリー	SHMMAX	0.5 × ( マシン内の現在の物理メモリー)  この設定は、Oracle8i またはオペレーティング・システムに共有メモリーがどれだけ必要で、どれだけ使用されるかということには影響しません。これは、最大許容サイズを示しています。また、オペレーティング・システムのカーネル・リソースにも影響しません。
	SHMMIN	1
	SHMMNI	100
	SHMSEG	10
セマフォ	SEMMNI	100
	SEMMSL	システムの Oracle データベースの、 initSID.ora ファイルの PROCESSES パラメータ の最大値に 10 を加えた値を設定します。  PROCESSES パラメータは、ORACLE_HOME/dbs ディレクトリ下の各 initSID.ora ファイルに あります。リリース 8.1.5 のビルトイン・データベ ース用の PROCESSES のデフォルト値は、50 です。
	SEMMNS	各 Oracle データベースの PROCESSES パラメータ の最大値を除いた合計に、PROCESSES の最大値の 2 倍と、Oracle データベース数の 10 倍を加えた値 を設定します。計算式の例は、2-11 ページの 「Oracle8i 用に UNIX カーネルを構成する」を参照 してください。
	SEMOPM	100
	SCORLIM	0X7FFFFFFF  コア・ダンプ・サイズのソフト制限です。

表 2-4 SCO UnixWare の UNIX 環境の設定

環境要因	Oracle8i の要件	
	HCORLIM	0X7FFFFFFF コア・ダンプ・サイズのハード制限です。ご使用のシステムで設定できる最大値を設定します。
	SDATLIM	0X7FFFFFFF プロセスのヒープ領域です。設定できる最大値を設定します。
	HDATLIM	0X7FFFFFFF このパラメータは SDATLIM と同じです。
	SVMMLIM	0X7FFFFFFF プロセスの仮想メモリー・サイズです。設定できる最大値を設定します。
	DEDICATED_MEMORY	
		推奨値はありません。 物理メモリー 4K ページ分が特別な共有メモリー・セグメント用に予約されています。大きな物理メモリーのシステムを使用する場合に設定します。
	HVMMLIM	0X7FFFFFFF このパラメータは SVMMLIM と同じです。
	SFSZLIM	0X7FFFFFFF プロセスで指定できる最大ファイル・サイズです。設定できる最大値を設定します。
	HFSZLIM	0X7FFFFFFF このパラメータは SFSZLIM と同じです。
	HFNOLIM	2048 プロセスで指定できる、ファイル記述子（オープン・ファイル）の最大数です。
	SFNOLIM	128 プロセスで指定できる、ファイル記述子（オープン・ファイル）の最大数です。
	NPROC	20 + (8 × MAXUSERS) プロセスの最大数です。20 + (8 × MAXUSERS) の式で、最大 12500 まで設定できます。

表 2-4 SCO UnixWare の UNIX 環境の設定

環境要因	Oracle8i の要件
ARG_MAX	1,048,576 プログラムのコマンド行の最大長を指定します。このパラメータのデフォルトは 5KB です。Oracle アプリケーションでは、このパラメータに大きい値を設定してください。
NPBUF	100 指定したときにアクティブにできる RAW I/O 要求の最大数です。
MAXUP	1000 指定したユーザー ID で作成できるプロセス数の制限です。リモート・クライアントが、SQL*Net V2 を使用してデータベース・サーバーに接続する場合、このパラメータには予想できる同時接続の最大数より大きい値を設定します。
STRTHRESH	0x500000 ストリームのリソース用にシステムに割り当てられる最大バイト数です。
パラメータ・ファイル: /etc/default/login	
ULIMIT	無制限です。 デフォルトのログイン・ファイル (/etc/default/login) では、ULIMIT の値を、作成する必要がある最も大きいデータベース・ファイル・サイズ (単位はバイト) より大きい値に設定するか、またはすべての値の設定を解除します。
<b>注意:</b> 前述のカーネル・パラメータが現行の値よりも少ない場合、現行の値を使用してください。この要件は、Oracle8i だけに適用されます。他のプログラムで共有メモリーおよびセマフォを使用している場合は、その値に従って調整する必要があります。現行および今後のデータベース要件を計画している場合、カーネルの変更を有効にするためにシステムの再起動が必要であることを考慮してください。	
マウント・ポイント (記憶デバイス)	Oracle Universal Installer には、2 つのマウント・ポイントが必要です。1 つはソフトウェア用、1 つはデータベース・ファイル用です。OFA 準拠データベースには、ディレクトリ構造の同一レベルにある 4 つ以上のマウント・ポイントが必要です。1 つはソフトウェア用、3 つ以上はデータベース・ファイル用です。

表 2-4 SCO UnixWare の UNIX 環境の設定

環境要因	Oracle8i の要件
Oracle ロール用の UNIX グループ	UNIX グループには、OSDBA ロールが必要です。このマニュアルでは、グループ名は dba であることを前提としています。OSOPER ロールは、OSDBA と同一のグループまたは異なるグループに属していることがあります。
OUI oraInventory 用の特別 UNIX グループ	ORACLE_HOME に Oracle をインストールするすべてのユーザーは、同一の UNIX グループに属している必要があります。OUI Inventory は、マシン上のすべての ORACLE_HOME によって共有されています。OUI Inventory のグループは書き込み可能です。現行のプライマリ・グループと同様に、oinstall を使用してインストールすることをお勧めします。
UNIX アカウント	Oracle8i システムのインストールおよびアップグレード専用で、1 つの UNIX アカウントが必要です。このアカウントは、OSDBA が使用するグループのメンバーである必要があります。
ファイル作成の権限	umask に 022 を設定します。
ORACLE_BASE	必須ではありませんが、OFA 準拠のインストレーションの一部として設定することをお勧めします。詳細は、2-17 ページの「ORACLE_BASE」を参照してください。
DISPLAY	サーバー・マシンに接続するマシン名およびステーションのモニターを設定します。
JAVA_HOME	/usr/java
LD_LIBRARY_PATH	/usr/java/lib を含めて設定してください。
PATH	<p>検索パスには、次のすべてが設定されている必要があります。</p> <p>\$ORACLE_HOME/bin、/bin、/opt/bin、/usr/bin、/usr/ccs/bin、および /usr/java/bin</p> <p>検索パスに /usr/ucb を入れる場合は、/usr/ccs/bin の後に指定してください。</p>
TMPDIR	oracle アカウントに書き込み権限があり、100MB 以上の空き領域があるディレクトリを指定する必要があります。このディレクトリのデフォルトは、/var/tmp です。

表 2-5 Solaris Intel の UNIX 環境の設定

環境要因		Oracle8i の要件
UNIX カーネル・パラメータ:		
共有メモリー	SHMMAX	0.5 × (マシン内の現在の物理メモリー)  この設定は、Oracle8i またはオペレーティング・システムに共有メモリーがどれだけ必要で、どれだけ使用されるかということには影響しません。これは、最大許容サイズを示しています。また、オペレーティング・システムのカーネル・リソースにも影響しません。
	SHMMIN	1
	SHMMNI	100
	SHMSEG	10
セマフォ	SEMMNI	100
	SEMMSL	そのシステムの Oracle データベースの、 initSID.ora ファイルの PROCESSES パラメータの最大値に 10 を加えた値を設定します。  PROCESSES パラメータは、ORACLE_HOME/dbs ディレクトリ下の、各 initSID.ora ファイルにあります。リリース 8.1.5 のビルトイン・データベース用の PROCESSES のデフォルト値は、50 です。
	SEMMNS	各 Oracle データベースの PROCESSES パラメータの最大値を除いた合計に、PROCESSES の最大値の 2 倍と、Oracle データベース数の 10 倍を加えた値を設定します。計算式の例は、2-11 ページの「Oracle8i 用に UNIX カーネルを構成する」を参照してください。
	SEMOPM	100
<b>注意:</b> 前述のカーネル・パラメータが現行の値よりも少ない場合、現行の値を使用してください。この要件は、Oracle8i だけに適用されます。他のプログラムで共有メモリーおよびセマフォを使用している場合は、その値に従って調整する必要があります。現行および今後のデータベース要件を計画している場合、カーネルの変更を有効にするためにシステムの再起動が必要であることを考慮してください。		

表 2-5 Solaris Intel の UNIX 環境の設定

環境要因	Oracle8i の要件
マウント・ポイント (記憶デバイス)	Oracle Universal Installer には、2 つのマウント・ポイントが必要です。1 つはソフトウェア用、1 つはデータベース・ファイル用です。OFA 準拠データベースには、ディレクトリ構造の同一レベルにある 4 つ以上のマウント・ポイントが必要です。1 つはソフトウェア用、3 つ以上はデータベース・ファイル用です。
Oracle ロール用の UNIX グループ	UNIX グループには、OSDBA ロールが必要です。このマニュアルでは、グループ名は dba であることを前提としています。OSOPER ロールは、OSDBA と同一のグループまたは異なるグループに属していることがあります。
OUI oraInventory 用の 特別 UNIX グループ	ORACLE_HOME に Oracle をインストールするすべてのユーザーは、同一の UNIX グループに属している必要があります。OUI Inventory は、マシン上のすべての ORACLE_HOME によって共有されています。OUI Inventory のグループは書き込み可能です。現行のプライマリ・グループと同様に、oinstall を使用してインストールすることをお勧めします。
UNIX アカウント	Oracle8i システムのインストールおよびアップグレード専用で、1 つの UNIX アカウントが必要です。このアカウントは、OSDBA が使用するグループのメンバーである必要があります。
ファイル作成の権限	umask に 022 を設定します。
ORACLE_BASE	必須ではありませんが、OFA 準拠のインストールの一部として設定することをお勧めします。詳細は、2-17 ページの「ORACLE_BASE」を参照してください。
DISPLAY	サーバー・マシンに接続するマシン名およびステーションのモニターを設定します。
PATH	<p>検索パスには、次のすべてが設定されている必要があります。</p> <p>\$ORACLE_HOME/bin、/bin、/opt/bin、/usr/bin、および /usr/ccs/bin</p> <p><b>注意:</b> 検索パスに /usr/ucb を入れる場合は、/usr/ccs/bin の後に指定してください。</p>
TMPDIR	oracle アカウントに書き込み権限があり、100MB 以上の空き領域があるディレクトリを指定する必要があります。このディレクトリのデフォルトは、/var/tmp です。

## root ユーザーで行う設定タスク

Oracle8i の環境を設定するには、root ユーザーでログインして、次のタスクを行います。

- ❑ Oracle8i 用に UNIX カーネルを構成する
- ❑ マウント・ポイントを作成する
- ❑ データベース管理者用の UNIX グループを作成する
- ❑ OUI Inventory 用の UNIX グループを作成する
- ❑ oracle ソフトウェア所有者の UNIX アカウントを作成する

---

**注意：** /var/opt/oracle ディレクトリが存在しない場合、または oracle ユーザーに /var/opt/oracle/oratab (DG/UX Intel の場合は、/etc/oratab) ファイルに対する書き込み権限がない場合、前述のタスクの他に、インストールの始めに root 権限が必要です。また、root.sh スクリプトを実行するには、インストールの終わりで root 権限が必要です。

---

### ▶▶ Oracle8i 用に UNIX カーネルを構成する

Oracle8i の共有グローバル領域 (SGA) 構造に割り当てる UNIX カーネル・プロセス間通信 (IPC) パラメータを構成します。SGA に割り当てるだけの十分な共有メモリーがシステムにない場合は、データベースを起動できません。

1. ipcs コマンドを使用して、システムの現行の共有メモリー、セマフォ・セグメントおよびそれらの識別番号と所有者を調べます。

---

**注意：** Solaris Intel の共有メモリーは動的にロードされるため、ipcs を実行すると、システムに共有メモリー機能がないことを示すメッセージが表示される場合があります。共有メモリーのドライバは、Oracle8i のインスタンスが開始された後にロードされます。システムに十分な共有メモリーがあることを確認するには、/etc/system ファイルを調べてください。

---

2. 次に示すカーネル・パラメータに相当する値を設定します。

- 共有メモリー・セグメントの最大サイズ (SHMMAX)
- 共有メモリー・セグメントの最小サイズ (SHMMIN)
- システムの共有メモリー識別子の最大数 (SHMMNI)
- ユーザー・プロセスが接続できる共有メモリー・セグメントの最大数 (SHMSEG)
- システムのセマフォ識別子の最大数 (SEMMNI)
- セットのセマフォの最大数 (SEMMSL)
- システムのセマフォの最大数 (SEMMNS)
- semop コールあたりの操作の最大数 (SEMOPM)

共有メモリーの合計値は、次の計算式で決まります。

$SHMMAX \times SHMSEG$

表 2-2 に推奨値を示します。推奨値は 1 つのインスタンスに対する最適値で、`initstid.ora` ファイルのデフォルト値の基になっています。複数インスタンスをインストールする場合、または `initstid.ora` ファイルを大幅に変更する場合は、この値を高めに設定します。

SEMMNS のカーネル・パラメータを設定するには、表 2-2 の計算式を使用します。たとえば、`initstid.ora` ファイルで、3 つの Oracle インスタンスに対して PROCESSES パラメータを指定するシステムの場合、次のように設定します。

```
ORACLE_SID=A, PROCESSES=100
ORACLE_SID=B, PROCESSES=100
ORACLE_SID=C, PROCESSES=200
```

SEMMNS の値は、次のように計算されます。

$SEMMNS = ((A=100) + (B=100)) + ((C=200) \times 2) + ((\text{インスタンス} = 3) \times 10) = 630$

オペレーティング・システムに対するパラメータを大きく設定しすぎると、マシンを起動できなくなります。パラメータの制限の詳細は、Intel UNIX のドキュメントを参照してください。

Solaris Intel の場合、最小の推奨値で UNIX カーネルを構成するには、次に示す行を `/etc/system` ファイルに追加します。

```
set shmsys:shminfo_shmmax=4294967295
set shmsys:shminfo_shmin=1
set shmsys:shminfo_shmmni=100
set shmsys:shminfo_shmseg=10
```



```
set semsys:seminfo_semmni=100
set semsys:seminfo_semmns=100
set semsys:seminfo_semmns=200
set semsys:seminfo_semopm=100
set semsys:seminfo_semvmx=32767
```

- カーネル、共有メモリー、またはセマフォのパラメータを変更した場合は、システムを再起動します (Solaris Intel の場合)。カーネル・パラメータを構成した場合は、システムを再起動します (SCO UnixWare の場合)。

---

**注意：** SCO UnixWare の場合、`idtune` コマンドを使用してください。これは、`/etc/conf/cf.d/stune` ファイルを変更して、UNIX カーネル・パラメータのデフォルト値を変更するコマンドです。この変更を反映してカーネルを再構築するには、`idbuild(1M)` を使用してください。

---



---

**警告：** 指定されたパラメータの最大許容値が `/etc/conf/cf.d/stune` ファイルで要求された値と同じでない場合は、`/etc/conf/cf.d/mtune` ファイルの編集も必要です。`mtune` のすべてのパラメータが変更できるわけではありません。たとえば、`SHMMAX` を変更するとシステムの問題が発生します。詳細は、ご使用のオペレーティング・システムのサポートへ確認してください。

---

## マウント・ポイントを作成する

Oracle8i には、2 つ以上のマウント・ポイントが必要です。1 つはソフトウェア用、1 つ以上はデータベース・ファイル用です。最適フレキシブル・アーキテクチャ (OFA) 準拠でインストールするには、4 つ以上のマウント・ポイントが必要です。1 つはソフトウェア用、3 つ以上はデータベース・ファイル用です。

Oracle8i で使用するすべてのソフトウェアおよびデータベースのマウント・ポイント名は、`/pm` という形式で設定します。この場合、`p` は文字列定数、`m` は複数のマウント・ポイントを区別するための固定長キーです。表 2-6 に、マウント・ポイント・ネーミング計画の例を示します。

表 2-6 マウント・ポイント・ネーミング計画の例

ソフトウェアのマウント・ポイント	データベースのマウント・ポイント
/u01	/u02
	/u03
	/u04

**参照：** OFA の詳細は、『Oracle8i for Intel UNIX (DG/UX Intel, SCO UnixWare, Solaris Intel) 管理者リファレンス』の付録 A「最適フレキシブル・アーキテクチャ」を参照してください。

## ▶▶ データベース管理者用の UNIX グループを作成する

インストール中に 2 つの Oracle ロール (DBA および OPERATOR) が作成されます。データベース管理者は、対応する UNIX グループのメンバーになると、これらのロールが与えられます。したがって、これらのロール用にグループを作成した後で、*oracle* ユーザーとしてログインし、Oracle Universal Installer を起動する必要があります。ロールには、2 つ別々の UNIX グループまたは 1 つのグループを割り当てます。

Intel UNIX では、dba という名前のグループを作成するために使用するユーティリティはプラットフォーム固有です。

DG/UX Intel の場合、sysadm ユーティリティを使用します。

SCO UnixWare の場合、scoadmin ユーティリティを使用します。

Solaris Intel の場合、admintool ユーティリティを使用します。

OUI は、Oracle DBA および OPERATOR 権限の両方に、デフォルトで UNIX グループの dba を割り当てます。dba グループを作成していない場合は、選択した名前を入力するプロンプトが表示されます。

(Oracle8i のドキュメントでは、これらの UNIX グループを OSDBA グループおよび OSOPER グループと呼びます。)

## ▶▶ OUI Inventory 用の UNIX グループを作成する

Intel UNIX では、groupadd ユーティリティを使用して oinstall という名前のグループを作成します。oinstall グループは、OUI oraInventory を所有しています。インストールを行うユーザー・アカウントは、このグループのメンバーである必要があります。

## ▶▶ oracle ソフトウェア所有者の UNIX アカウントを作成する

*oracle* アカウントは、インストール後に Oracle8i ソフトウェアを所有する UNIX アカウントです。OUI は、このアカウントで実行する必要があります。

Intel UNIX では、*oracle* アカウントを作成するためのオペレーティング・システム管理ユーティリティは、プラットフォーム固有です。

DG/UX Intel の場合、sysadm ユーティリティを使用します。

SCO UnixWare の場合、scoadmin ユーティリティを使用します。

Solaris Intel の場合、admintool ユーティリティを使用します。

ログイン名	任意です。このマニュアルでは <code>oracle</code> アカウントとします。
デフォルト GID	<code>oinstall</code> グループに対応する GID を設定します。
ホーム・ディレクトリ	他のユーザーのホーム・ディレクトリとの間で一貫性のあるホーム・ディレクトリを選択します。 <code>oracle</code> アカウントのホーム・ディレクトリは、 <code>ORACLE_HOME</code> ディレクトリと同一である必要はありません。
ログイン・シェル	デフォルトは <code>/bin/sh</code> 、 <code>/bin/csh</code> または <code>/bin/ksh</code> のいずれかです。ただし、このマニュアルの例では Bourne シェル ( <code>/bin/sh</code> ) を想定しています。

---

**注意：** `oracle` アカウントを使用するのは、Oracle ソフトウェアをインストールおよびメンテナンスする場合だけです。Oracle8i と関係ない目的では使用しないでください。`oracle` (UNIX) アカウントを使用する場合は、データベース・ユーザーとしてログインしないでください。また、`oracle` アカウントとして `root` を使用しないでください。

---

複数の Oracle Server が存在するサイトでは、同一の `oracle` アカウント、または別々の `oracle` アカウントで Oracle Server をインストールできます。すべての `oracle` アカウントは、`oraInventory` ディレクトリを所有する `oinstall` グループに属している必要があります。ただし、セキュリティのために、別のシステム用に別の OSDBA グループを使用することもできます。OSDBA グループを使用できるのは、`oracle` ユーザーが DBA グループのメンバーではない場合のみです。OSDBA および OSOPER グループを入力するプロンプトが表示されたら、デフォルト以外の値を入力します。

## ▶▶ oratab ファイルを作成する

Oracle インスタンスの情報は、`oratab` ファイルに格納されます。このファイルは `oracle` アカウントに所有されますが、生成されるとき `root` 権限を必要とするディレクトリの下に置かれます。次のディレクトリの下にある `oratab` ファイルの権限を生成または設定するには、`cdrom_mount_point/orainst/oratab.sh` スクリプトを実行してください。

DG/UX Intel の場合、`/etc/oratab` ディレクトリです。

SCO UnixWare の場合、`/var/opt/oracle` ディレクトリです。

Solaris Intel の場合、`/var/opt/oracle` ディレクトリです。

これらのディレクトリが存在しない場合は、作成してください。

## oracle ユーザーで行う設定タスク

oracle アカウントでログインして、次のタスクを行います。

- ☐ ファイル作成の権限を設定する
- ☐ 環境変数を設定する
- ☐ 現行セッションの環境を更新する

### ■ ファイル作成の権限を設定する

OUI が作成するファイルに対して、oracle アカウント用に、umask で 022 を設定することによって、group および other には読み権限および実行権限だけを与え、書き込み権限を与えないようにします。

1. umask コマンドを実行して、現行の設定を確認します。
2. umask コマンドが 022 を返さない場合は、oracle アカウントの .profile または .login ファイルに次のように記述します。

```
umask 022
```

### ■ 環境変数を設定する

OUI を起動する前に、この項で示されている環境変数を設定します。

---

**注意：** Oracle Server がすでにシステムに存在している場合、既存の設定と新しい環境に対して選択する設定が関連している場合があります。

---

### DISPLAY

ソフトウェアがインストールされているシステムに接続するため、ご使用のワークステーションが使用しているマシン名または IP アドレス、X サーバー、スクリーンを設定します。ソフトウェアがインストールされているシステムのマシン名または IP アドレスは使用しないでください。ワークステーションのマシン名または IP アドレスを使用してください。X サーバーおよびスクリーンにどんな値が設定されているかわからない場合は、両方に 0（ゼロ）を指定します。OUI を起動した際に「Failed to connect to server」、「Connection refused by server」または「Can't open display」という旨の Xlib エラーが表示される場合は、次のいずれかのコマンドを実行します。

Bourne または Korn シェルの場合

Oracle データベースがインストールされているサーバーのときは、次のように入力します。

```
$ DISPLAY=workstation_name:0.0  
$ export DISPLAY
```

ワークステーションに接続するときは、次のように入力します。

```
$ xhost +server_machine_name
```

#### C シェルの場合

Oracle データベースがインストールされているサーバーのときは、次のように入力します。

```
% setenv DISPLAY workstation_name:0.0
```

ワークステーションに接続するときは、次のように入力します。

```
% xhost +server_machine_name
```

#### ORACLE\_BASE

Oracle ソフトウェアおよび管理ファイル構造の一番上にあるディレクトリを指定します。OFA 推奨値は、*software\_mount\_point/app/oracle* (例: /u01/app/oracle) です。OFA 準拠のシステムを使用していない場合、ORACLE\_BASE を設定しないでください。

#### ORACLE\_HOME

特定リリースの Oracle ソフトウェアをインストールするディレクトリを指定します。

OFA 推奨値は、\$ORACLE\_BASE/product/release  
(例: /u01/app/oracle/product/8.1.5) です。

ORACLE\_HOME に指定したディレクトリに、Oracle ソフトウェアがまだインストールされていないことを確認します。

#### NLS\_LANG

インストールまたは作成するデータベースで、US7ASCII (デフォルト) 以外のキャラクタ・セットを使用する場合は、NLS\_LANG を設定する必要があります。すべての有効なキャラクタ・セットは、このマニュアルの付録 A「各国語サポート」を参照してください。

#### ORA\_NLS33

US7ASCII 以外の格納キャラクタ・セットでデータベースを作成する場合に必要です。OUI の起動またはデータベースの作成前に、\$ORACLE\_HOME/ocommon/nls/admin/data に ORA\_NLS33 を設定してください。

#### PATH

検索パスに、次のすべてが設定されていることを確認してください。

- \$ORACLE\_HOME/bin、/bin、/usr/bin

---

**注意：** Solaris Intel では、SUN C コンパイラが存在する場合に、検索パスに /usr/ccs/bin および /opt/SUNWsprow/bin も含まれていることを確認してください。

---

- ユーザーが作成したローカル bin ディレクトリ

---

**注意：** 検索パスに /usr/ucb を入れる場合は、/usr/ccs/bin の後に指定してください。

---

#### TMPDIR

Installer に書き込み権限があり、100MB 以上の空き領域があるディレクトリを指定する必要があります。

DG/UX Intel の場合、デフォルト設定は /tmp です。

SCO UnixWare の場合、デフォルト設定は /var/tmp です。

Solaris Intel の場合、デフォルト設定は /var/tmp です。

#### ▶▶ 現行セッションの環境を更新する

oracle アカウントの .profile または .login ファイルで環境変数を設定した後、現行のシェル・セッションの環境を更新します。

Bourne または Korn シェルの場合は、次のように入力します。

```
$ . ~/.profile
```

C シェルの場合は、次のように入力します。

```
% source .login
```

## Oracle 製品の設定タスク

必要に応じて、次のタスクを実行します。

### □ Oracle8i オプション

- Oracle Parallel Server のインストール前タスク (DG/UX Intel の場合)

- Tools およびプリコンパイラ
  - Pro\*COBOL プリコンパイラのインストール前のタスク (DG/UX Intel および SCO UnixWare の場合)
  - Pro\*C/C++ プリコンパイラのインストール前のタスク
- ネットワーク製品およびシステム管理製品
  - Net8 のインストール前のタスク
  - Oracle Names Server のインストール前のタスク
  - Oracle Supported Protocol のインストール前のタスク

## Oracle8i オプション

### ▶▶ Oracle Parallel Server のインストール前のタスク

Parallel Server をインストールする前に、次のタスクを実行してください。  
(DG/UX Intel の場合)

1. RAW デバイスを作成します。

Oracle Parallel Server データベースに関連するすべてのファイルは、クラスタ内のすべてのノードからアクセスできるように、RAW ボリュームに格納する必要があります。制御ファイルおよびデータ・ファイルは、すべてのインスタンスに共有されます。インスタンスごとに個別のログ・ファイルがありますが、インスタンスの回復時に、すべてのインスタンスにすべてのログ・ファイルのアクセス権がなければなりません。

**参照：** RAW デバイス作成の詳細は、『Oracle8i for Intel UNIX (DG/UX Intel, SCO UnixWare, Solaris Intel) 管理者リファレンス』を参照してください。

2. 各データ・ファイル、制御ファイルおよび REDO ログ・ファイルに対して、エントリ付きの ASCII ファイルを作成します。

**参照：** ASCII ファイル作成の詳細は、Oracle8i Parallel Server 関連マニュアルを参照してください。

3. DBCA\_RAW\_CONFIG 環境変数を作成し、ASCII ファイルを指定します。

#### root ユーザーで行うタスク

4. クラスタ内のすべてのノード上で、OSDBA グループが /etc/group ファイルに定義されていることを確認します。OSDBA グループ名およびグループ番号（インストール中に指定する場合は、OSOPER グループも）は、1 つのデータベースにアクセスできる UNIX クラスタのすべてのノード上で共通である必要があります。OSDBA および OSOPER グループの UNIX グループ名のデフォルトは、dba です。

5. UNIX アカウントを、クラスタの各ノードに作成します。次の条件を満たしていることを確認してください。
  - OSDBA グループのメンバーである
  - Oracle ソフトウェアをインストールおよび更新するためだけに使用する
  - リモート・ディレクトリへの書き込み権限がある
6. Oracle ソフトウェア・ディレクトリ構造の最上位ディレクトリとなるように、マウント・ポイント・ディレクトリを各ノードに作成します。次の条件を満たしていることを確認してください。
  - 各ノードのマウント・ポイント名が第 1 ノードのマウント・ポイント名と同一である
  - `oracle` アカウントには、読み込み、書き込みおよび実行権限がある

**参照：** Oracle マウント・ポイントのネーミング規則の詳細は、この章の「マウント・ポイントを作成する」を参照してください。

7. クラスタ内のその他のノードに関するエントリを `oracle` アカウントの `.rhosts` ファイルまたは `/etc/hosts.equiv` ファイルに追加して、ユーザー等価を設定します。  
`root` アカウントを終了します。

#### **oracle アカウントで行うタスク**

クラスタ内の各ノードにリモート・ログイン (`rlogin`) して、`oracle` アカウントのユーザー等価を確認します。パスワードを入力するプロンプトが表示される場合、`oracle` アカウントの属性は、すべてのノード上で同一ではありません。ユーザー等価が設定されていないと、OUI は、`rcp` コマンドを使用してリモート・ディレクトリに Oracle 製品をコピーできません。

ユーザー等価を設定していない場合、2-20 ページの手順 7 を実行する必要があります

## **Tools およびプリコンパイラ**

この項の指示に従って、Tools およびプリコンパイラのインストール前のタスクを行います。

### **▶▶ Pro\*COBOL プリコンパイラのインストール前のタスク**

DG/UX Intel および SCO UnixWare の場合は、次の手順を行います。

1. COBOL コンパイラの実行ファイルが、PATH 設定されているディレクトリにあることを確認します。
2. `$COBLIB` が `LD_LIBRARY_PATH` にあることを確認します。



3. COBDIR 環境変数を、COBOL コンパイラがインストールされているディレクトリに設定します。

**参照：** COBDIR および COBLIB 環境変数に設定する値を決定するには、ご使用の COBOL 固有のドキュメントを参照してください。

## ▶▶ Pro\*C/C++ プリコンパイラのインストール前のタスク

C コンパイラの実行ファイルが、PATH 設定されているディレクトリにあることを確認します。

## ネットワーク製品およびシステム管理製品

### Net8 Configuration Assistant

Net8 Server または Net8 Client がインストールされている場合、Installer は、ネットワークの初期設定のために Net8 Configuration Assistant を自動的に起動します。

## ▶▶ Net8 のインストール前のタスク

Net8 をインストールする前に、現行の ORACLE\_HOME 固有の Net8 リスナーをすべて停止します。リスナーが実行されていないことを確認するには、次のように入力します。

```
% ps -ef | grep tns
```

リスナー制御ユーティリティを使用して、実行されているリスナーを停止するには、次のように入力します。

```
% lsnrctl listener_name stop
```

## ▶▶ Oracle Names Server のインストール前のタスク

既存の Names Server を使用する場合は、マシンのホスト名用に別名を作成し、`/etc/hosts` ファイルに `oramesrvr[0-4]` を設定します。次に例を示します。

```
128.128.44.123 mach1.eng oramesrvr0
```

また、ネットワーク内のすべてのサーバーおよびクライアント・マシン上で、既存の Names Server の別名を作成する必要があります（既存の Names Server とは、クライアントが個々に構成されていなくてもネットワーク上で見つけられるようにデフォルト名を使用している Names Server です）。

**参照：** Names Server および既存の Names Server の詳細は、『Oracle8i Net8 管理者ガイド』を参照してください。

## ▶▶ Oracle Supported Protocol のインストール前のタスク

Oracle Supported Protocol をインストールする前に、基盤となるネットワークが機能し、正しく構成されていることを確認します。

### TCP/IP

TCP/IP プロトコルは、すべての Oracle8i のインストールで自動的にインストールされます。

ftp ユーティリティを使用してテスト・ファイルを転送し、ネットワークが正しく機能していることを確認します。

```
$ ftp remote_server_name
ftp> put test_filename
ftp> get test_filename
```

### SPX/IPX (Solaris Intel の場合)

Solaris Intel の設定情報については、TotalNET (TAS) のドキュメントを参照してください。

### SPX/IPX (DG/UX Intel の場合)

Oracle SPX/IPX Protocol をインストールする前に、次のタスクを実行してください。

1. すべてのパケット・タイプがネットワーク上で認識されるように、システムを構成します。このタスクについては、以降の項で説明します。詳細は、ベンダーから提供されているドキュメントを参照してください。

#### パケット・タイプのサポート (DG/UX Intel の場合)

DG/UX Intel で SPX/IPX 用のパケット・タイプを構成するために、サポートされているイーサネット・パケット、ブリッジの使用、およびイーサネット・パケットの使用に習熟しておく必要があります。

---

---

**参照：** パケット・タイプの詳細は、DG/UX Intel の SPX/IPX および Novell のドキュメントを参照してください。

---

---

---

---

**注意：** DG/UX Intel は、両方のイーサネット・パケットをサポートしています。

---

---

Oracle SPX/IPX Protocol をインストールする前に、パケット・タイプを検討します。Novell 社では、パケット・タイプが異なるシステムは、物理的に同一の LAN ケーブルに接続されている場合でも、論理的に別々の LAN 上に置くことを検討します。LAN 上のノードは、同

一のパケットを使用します。そうでない場合は Novell Router を使用して、接続先のパケット・タイプに適合するようにパケットを変換します。

- イーサネット・パケットを使用するために、Novell LAN を構成します。詳細は、次の「イーサネット・パケット用の Netware LAN の構成」を参照してください。
- イーサネットおよび Novell パケットを使用するために、Novell ファイル・サーバーを構成します。この場合、Novell パケット・タイプを使用するクライアントはイーサネット・パケットを使用するサーバーと通信できます。これは、Novell サーバーがパケットを変換するためです。

このオプションの欠点は、パケットを変換するために 2 度送信する必要があることです。これによって、パフォーマンスが低下します。このオプションの詳細は、「両方のパケット・タイプをサポートするためのサーバーの構成」を参照してください。

### イーサネット・パケット用の Netware LAN の構成

イーサネット・パケット用の Netware LAN の構成の正確な手順は、LAN システムのソフトウェアの使用方法によって異なります。この項では、次に示す LAN 構成に基づいた 3 つの手順について説明します。

- Novell Netware 286 ファイル用の Novell ファイル・サーバー
- Novell Netware 386 ファイル用の Novell ファイル・サーバー
- DOS ワークステーション・シェル

**Novell Netware 286 ファイル用の Novell ファイル・サーバー上では、Netware 286 にサポートされている各パケット・タイプに対して 1 つのイーサネット・ボードが必要です。Netware 286 下でパケット変換をサポートするには、イーサネット・ボードが同一の LAN に接続されている必要があります。Netware 286 は、内部または外部のブリッジとして構成する必要があります。**

次に示す手順で実行します。

1. ファイル・サーバー上のシステム・ディレクトリの中にある NET\$OS.EXE ファイルを書き込めるようにします。
  - スーパーバイザーで、ファイル・サーバーへログインします。SYSTEM ディレクトリから FILER を実行します。
  - メニューからファイル情報を選択します。
  - メニューから NET\$OS.EXE のファイルを選択します。
  - メニューから属性を選択します。
  - NET\$OS.EXE ファイルに書き込めるようにします。属性に「Read Only」を選択し、[Delete] キーを押します。プロンプトが表示されたら、選択されているのを確認します。
  - メニューおよび FILER プログラムを終了するには、[Esc] キーを数回押します。

2. NET\$OS.EXE を変換するには、ECONFIG を使用します。

```
$ ECONFIG NET$OS.EXE a:e 8137
```

ファイル・サーバーが2つ以上のネットワークに接続する場合は、a フィールドを UNIX サーバーが接続している LAN 用の LAN 識別子と置き換えます。

---

**注意：** ECONFIG.EXE ファイルは、フロッピー・ドライブ、クライアントのハードディスク、またはファイル・サーバーのハードディスクのいずれかにあります。ファイル・サーバーの PUBLIC ディレクトリへ、ECONFIG.EXE をコピーできます。

---

3. [Ctrl] キー、[Alt] キーおよび [Delete] キーを同時に押して、ファイル・サーバーを再起動します。

**Novell Netware 386 ファイル用の Novell ファイル・サーバー上では、LOAD LAN DRIVER** コマンドを使用してサポートされたパケット・タイプを指定します。デフォルトでは、Novell パケットがサポートされています。イーサネット・パッケージをサポートするには、次に示すような FRAME= のフィールドを追加するか、または変更して LOAD LAN DRIVER コマンドを編集します。

```
FRAME=Ethernet_II
```

**DOS ワークステーション・シェルでは、Novell Netware 配布製品とともに ECONFIG ユーティリティが含まれています。ECONFIG ユーティリティは、パケット・タイプを変更できます。シェルをフロッピー・ディスクの方法で作成している場合、ECONFIG は診断ディスクセット上にあります。ハードディスクの方法で作成している場合は、ECONFIG は DIAG ディレクトリの中にあります。IPX.COM ファイルは、ハードディスク（またはディスクセット）上の SHGEN-2 ディレクトリにあります。**

1. Ethernet II パケットを使用するため、DOS システムを変換します。

```
DOS> ECONFIG IPX.COM shell:e 8137
```

2. 変換後、新しい IPX.COM を使用して新しい DOS クライアント・ディスクセットを作成します。すべてのワークステーションを再起動して、新しい IPX.COM をロードします。
3. ECONFIG というプログラムを使用して、ファイル・サーバー・オペレーティング・システムのファイル NET\$OS.EXE の変換準備をします。NET\$OS.EXE は、ファイル・サーバーの SYSTEM ディレクトリの中にあります。ファイル・サーバーの PUBLIC ディレクトリへ、ECONFIG.EXE をコピーできます。
4. NET\$OS.EXE ファイルを書き込めるようにします。
  - スーパーバイザーで、ファイル・サーバーへログインします。SYSTEM ディレクトリから FILER を実行します。
  - メニューからファイル情報を選択します。

- メニューから NET\$OS.EXE のファイルを選択します。
  - メニューから属性を選択します。
  - NET\$OS.EXE ファイルに書き込めるようにします。属性に「Read Only」を選択し、[Delete] キーを押します。プロンプトが表示されたら、選択されているのを確認します。
  - メニューおよび FILER プログラムを終了するには、[Esc] キーを数回押します。
5. NET\$OS.EXE を変換するには、ECONFIG を使用します。
- ```
$ ECONFIG NET$OS.EXE a:e 8137
```

ファイル・サーバーが 2 つ以上のネットワークに接続する場合は、a を UNIX サーバーが接続している LAN 用の LAN 識別子と置き換えます。

6. [Ctrl] キー、[Alt] キーおよび [Delete] キーを同時に押して、ファイル・サーバーを再起動します。

#### Novell パケットをサポートするための DG/UX ファイル・サーバーの構成

Novell パケット・タイプをサポートするために DG/UX ファイル・サーバーを構成するには、次の操作を行います。

1. /usr/opt/netware/etc/NPSConfig ファイルで次のように入力して、必須パラメータを設定します。

```
lan_1_adapter=/dev/dpen0
lan_1_adapter_type=ETHERNET_DLPI
lan_1_frame_type=ETHERNET_II
lan_1_module=PAD
```

---

**注意：** これらの設定は、ネットワーク・ハードウェアによって異なります。

---

2. llc デバイスが構成されたことを確認します。
3. llcd デーモンが実行中であることを確認します。

#### 両方のパケット・タイプをサポートするためのサーバーの構成

---

**注意：** この情報は、DG/UX Intel システムだけに適用します。

---

Netware 286 は、イーサネットおよび Novell パケットの両方をサポートしています。

Netware 386 は、同一のイーサネット・ボード上で 2 つ以上のパケット・タイプをサポートします。Netware 386 の LOAD LAN DRIVER コマンドは、サポートしているパケット・タイプごとに 1 回 LAN ドライバをロードします。LOAD LAN DRIVER コマンドの詳細は、『Netware 386 システム管理者ガイド』を参照してください。(コマンドのテキストは、FRAME= の部分を除いて各パケット・タイプに対して同一である必要があります。)

Oracle SPX/IPX Protocol のユーザーは、Ethernet II および Ethernet 802.3 パケット・タイプをサポートします。Netware 386 で、ドライバがパケット・タイプごとに 1 回ロードされる場合、Novell デフォルト・パケット・タイプのクライアントは、UNIX ベースのオペレーティング・システム下の SPX サービスに接続できます。

### SCO UnixWare の SPX/IPX

SCO UnixWare で Oracle SPX/IPX Protocol をインストールする前に、すべてのパケット・タイプがネットワーク上で認識されるように、システムを構成します。詳細は、ベンダーから提供されているドキュメントを参照してください。

---

## インストール

この章では、Oracle Universal Installer (OUI) の起動および新規の Oracle8i インストールについて説明します。

- 製品のインストール・カテゴリおよびインストール・タイプ
- OUI の起動
- 初回の製品インストール
- データベースの作成
- 既存システムのアップグレードまたは移行
- Oracle ソフトウェアの削除
- Oracle Parallel Server のインストール
- 非問合せモードでのインストール

## 製品のインストール・カテゴリおよびインストール・タイプ

Oracle8i では、3 つのインストール・カテゴリ（Oracle8i Enterprise Edition、Oracle8i Client および Oracle Programmer）から 1 つを選択します。また、それぞれのカテゴリでインストール・タイプ（Typical、Minimal および Custom）を選択します。目的および要件に応じて、製品の組合せを選択してください。

表 3-1 に、3 つのインストール・カテゴリによってインストールできる製品を示します。

表 3-1 Oracle Universal Installer 製品インストール・カテゴリ

| 製品                                              | Oracle8i Enterprise Edition | Oracle8i Client | Oracle Programmer |
|-------------------------------------------------|-----------------------------|-----------------|-------------------|
| Oracle8i Server                                 | X                           |                 |                   |
| Oracle8i Client                                 |                             | X               |                   |
| Oracle Programmer                               |                             |                 | X                 |
| Net8 Assistant                                  | X                           | X               | X                 |
| Oracle Call Interface                           | X                           | X               | X                 |
| Oracle Advanced Security-Export Edition         | X                           | X               |                   |
| Oracle Object Type Translator                   | X                           | X               | X                 |
| Pro*C                                           |                             |                 | X                 |
| Pro*COBOL<br>(DG/UX Intel および SCO UnixWare の場合) |                             |                 | X                 |
| Pro*FORTRAN<br>(DG/UX Intel の場合)                |                             |                 | X                 |
| Oracle Universal Installer                      | X                           | X               | X                 |
| SQL*Plus                                        | X                           | X               |                   |
| Oracle8i Utilities                              | X                           | X               |                   |
| Net8 Server                                     | X                           |                 |                   |
| Net8 Client                                     | X                           | X               | X                 |
| Oracle Connection Manager                       | X                           |                 |                   |
| Oracle Intelligent Agent                        | X                           |                 |                   |
| Oracle Names                                    | X                           |                 |                   |



表 3-1 Oracle Universal Installer 製品インストール・カテゴリ

| 製品                                          | Oracle8/ Enterprise Edition | Oracle8/ Client | Oracle Programmer |
|---------------------------------------------|-----------------------------|-----------------|-------------------|
| Oracle Parallel Server<br>(DG/UX Intel の場合) | X                           |                 |                   |
| Oracle Database Configuration Assistant     | X                           | X               |                   |
| Oracle Data Migration Assistant             | X                           | X               |                   |
| Oracle Partitioning                         | X                           |                 |                   |
| Oracle <i>interMedia</i>                    | X                           |                 |                   |
| Oracle Visual Information Retrieval         | X                           |                 |                   |
| Oracle Spatial                              | X                           |                 |                   |
| Oracle Time Series                          | X                           |                 |                   |
| Intel UNIX Documentation                    | X                           | X               |                   |
| SQLJ Translator                             | X                           | X               | X                 |
| SQLJ Runtime                                | X                           | X               | X                 |
| JDBC/OCI Driver                             | X                           | X               | X                 |
| EJB/CORBA                                   | X                           | X               | X                 |

## OUI の起動

Installer を実行するには、次のタスクを行います。

- ☐ Oracle8i CD-ROM をマウントする
- ☐ OUI を起動する

### ▶ Oracle8i CD-ROM をマウントする

Oracle8i の CD-ROM は、RockRidge 拡張機能付きの ISO 9660 形式です。Volume Management ソフトウェア（Intel UNIX ではデフォルトで使用可能）を使用する場合、CD-ROM はディスク・ドライブへの挿入時に自動的に /cdrom/oracle8i にマウントされます。その後、3-5 ページの「OUI を起動する」へ進んでください。

Volume Management ソフトウェアを使用しない場合は、CD-ROM を手動でマウントします。CD-ROM をマウントおよびアンマウントするには、root 権限が必要です。CD-ROM をドライブから取り出す前に、umount コマンドを使用して、CD-ROM がアンマウントされていることを確認してください。

1. Oracle8i の CD-ROM を CD-ROM ドライブに入れます。
2. 次のように入力して、root でログインし、CD-ROM のマウント・ポイント・ディレクトリを作成します。

```
$ su root
# mkdir cdrom_mount_point_directory
```

3. 次のように入力して、CD-ROM ドライブをマウント・ポイント・ディレクトリにマウントし、root アカウントを終了します。

```
# mount options device_name cdrom_mount_point_directory
# exit
```

### 例 3-1 CD-ROM のマウント

#### DG/UX Intel の場合

```
# /etc/mount -t cdrom '/dev/pdsk/device_name' /cdrom
```

#### SCO UnixWare の場合

```
# mount -F cdfs -oro /dev/cdrom/c0b0t410 /cdrom
```

**Solaris Intel の場合**

Solaris Intel で、Solaris Volume Manager が実行中の場合、CD-ROM は通常 /cdrom に自動的にマウントされます。Solaris Volume Manager が実行中でない場合は、次のように入力して CD-ROM をマウントできます。

```
# /etc/mount -F hsfs -r /dev/dsk/c0t6d0p0 /cdrom
```

**▶▶ OUI を起動する**

---

---

**注意：** root ユーザーで OUI を実行しないでください。

---

---

次の手順に従って、OUI を起動します。

1. oracle ユーザーとしてログインします。
2. CD-ROM のマウント・ポイント・ディレクトリへ移動します。

```
cd cdrom_mount_point_directory
```

3. 次のように入力して、OUI を起動します。

```
./runInstaller
```

---

---

**注意：** OUI は、グラフィカル・インタフェースを使用しない非問合せ（サイレント）モードで、Oracle 製品をインストールできます。OUI のこの機能を使用する手順は、3-9 ページの「非問合せモードでのインストール」を参照してください。

---

---

## 初回の製品インストール

1. 「Welcome」ダイアログ・ボックスで「Next」ボタンをクリックして、インストールを開始します。
2. 「File Locations」ダイアログ・ボックスで、「Destination...」フィールドに目的の ORACLE\_HOME を入力します。

次へ進む前に、root として /tmp/orainstRoot.sh を実行するためのプロンプトが表示されます。これは、oraInventory ディレクトリの位置を示すポインタ・ファイルを作成するためのものです。

3. 「Available Products」ダイアログ・ボックスで、製品のインストール・カテゴリを選択し、次に表示される「Installation Types」ダイアログ・ボックスで、インストール・タイプを選択します。インストール・タイプの詳細は、3-2 ページの「製品のインストール・カテゴリおよびインストール・タイプ」を参照してください。すべてのインストール・タイプで利用できない製品は、表中で注釈が付けられています。
4. オンライン・ヘルプのダイアログ・ボックスを表示しながら作業を続けます。オンライン・ヘルプは、「Help」ボタンをクリックすると利用できます。
5. OUI によって Oracle 製品のインストールが完了したら、root.sh スクリプトを実行する必要があります。詳細は、第 4 章の「root.sh スクリプトを実行する」を参照してください。

## 初回インストール後の追加製品のインストール

1. 3-2 ページの表 3-1 を参照して、インストールする追加製品の製品インストール・カテゴリを確認します。
2. 「Welcome」および「File Locations」ダイアログ・ボックスを確認して、「Available Products」ダイアログ・ボックスへ進みます。このダイアログ・ボックスで、手順 1 で確認した製品インストール・カテゴリを選択します。
3. 「Installation Types」ダイアログ・ボックスで「Custom」を選択します。
4. 次の「Available Product Components」ダイアログ・ボックスで、現在インストールされている製品が選択された状態で表示されます。追加インストールする製品を選択します。

---

**注意：** 現在インストールされている製品は選択解除しないでください。  
選択解除すると、削除されてしまいます。

---

次の「Products to be Installed」ダイアログ・ボックスで、現在インストールされている製品が「Already Installed」に表示されます。選択した追加製品は、「New Installations」に表示されます。

## 製品の再インストール

再インストールするには、最初に「Oracle ソフトウェアの削除」の説明に従って、製品を削除する必要があります。削除後に、この章の「初回の製品インストール」または「非問合せモードでのインストール」で説明されているいずれかのインストール方法に従って、インストールします。

インストールが失敗または異常終了した場合は、3-8 ページの「Oracle ソフトウェアの削除」を参照してください。

## Oracle Parallel Server の再インストール

インストールが完了する前に失敗したため、再インストールする必要がある場合は、「Do you want to re-install *name of a product*?」と尋ねるすべての OUI ダイアログ・ボックスに対して、「Yes」ボタンをクリックします。そうしないと、他のノードに対してリモート・コピーを行う場合、再インストールしないことを指定した製品がどれか分からなくなってしまう。

## データベースの作成

OUI は、データベースを作成しません。ただし、すべてのサーバーのインストール・タイプでは、インストール・セッションの最後に、Oracle Database Configuration Assistant (DBCA) を自動的に起動するオプションを選択できます。Assistant は、デフォルトのデータベース、またはカスタマイズしたデータベースを作成できます。Assistant は、データベースを作成できます。また、調査および修正可能な SQL スクリプトを出力し、SQL\*Plus または Server Manager 経由で実行することもできます。

OUI とは別に、DBCA を起動することもできます。`$ORACLE_HOME/bin` が検索パスにあり、次の行が記述されていることを確認してください。

```
$ dbassist &
```

## 既存システムのアップグレードまたは移行

前回のソフトウェア・リリースからの既存のデータベースを使用するために Oracle8i をインストールする場合、Oracle8i を使用してマウントする前にデータベースをアップグレードまたは移行する必要があります。この作業の手順は、このマニュアルには記述されていません。詳細は、『Oracle8i 移行ガイド』を参照してください。

## Oracle ソフトウェアの削除

OUI を使用して Oracle ソフトウェアを削除するには、次の手順に従います。

1. 「Welcome」ダイアログ・ボックスで「De-install Products」ボタンをクリックするか、「OUI」画面で「Installed Products...」ボタンをクリックします。「Inventory」ダイアログ・ボックスが表示されたら、インストールされている製品が一覧表示されます。
2. 「Inventory」ダイアログ・ボックスで削除する製品を選択し、「Remove」ボタンをクリックします。

## インストール失敗後の対処

インストールが失敗した場合、再度インストールを行う前に、直前のセッション中に OUI が作成したファイルを削除する必要があります。

インストールに失敗した後は、次の手順で対処します。

1. OUI を起動します。
2. 「De-install Products」ボタンをクリックし、インストールが失敗した後に残された製品を選択します。
3. 「Remove」ボタンをクリックします。

完全に削除するには、次の項目を手動で削除する必要があります。

1. ORACLE\_HOME ディレクトリ
2. oraInventory/.../oui
3. oraInventory/.../jre

SCO UnixWare および Solaris Intel の場合、oraInventory ディレクトリの位置は、`/var/opt/oracle/oraInst.loc` ファイルから入手できます。DG/UX Intel の場合、このディレクトリの位置は、`/etc/oraInst.loc` ファイルから入手できます。

## Oracle Parallel Server のインストール

インストール中に、ソフトウェア・コンポーネントは、Oracle Universal Installer を実行するノードにインストールされ、クラスタにある選択された他のノードに展開されます。

**参照：** Oracle Parallel Server のインストールの詳細は、『Oracle8i Parallel Server セットアップおよび構成ガイド』を参照してください。

## 非問合せモードでのインストール

インストール・プロセス中に、OUI が使用する値および変数を含んだテキスト・ファイルであるレスポンス・ファイルを、OUI に提供することによって、非問合せインストール（つまりサイレント・インストール）を実行できます。レスポンス・ファイルを使用すると、OUI のグラフィカル・インタフェースがなくても、インストールを実行できます。

### レスポンス・ファイルの準備

レスポンス・ファイルは7つあり（各インストール・タイプおよび各カテゴリ1つずつ）、Oracle8i CD-ROM に含まれています。Typical レスポンス・ファイルは、OUI を使用して Typical インストールを非問合せモードで実行するのに、ほぼ完全に構成されています。Custom レスポンス・ファイルは、OUI のレスポンス・ファイルとして使用する前に、大幅に編集する必要があります。

レスポンス・ファイルを使用するには、Oracle8i の CD-ROM からご使用のシステムにマウントされたドライブへ、レスポンス・ファイルをコピーします。次に例を示します。

```
% cd cdrom_mount_point_directory/stage/Response/  
% cp typical815.rsp local_directory
```

ご使用のシステムに特定の情報を含めるには、使用するレスポンス・ファイルをテキスト・エディタで編集します。それぞれのファイルには、レスポンス・ファイルを適切に構成するための情報が含まれています。

### Oracle Universal Installer に対するレスポンス・ファイルの指定

インストール時に OUI にレスポンス・ファイルを使用させるには、3-5 ページの「OUI を起動する」に説明されている手順に従います。ただし、OUI の実行時にパラメータとして使用するレスポンス・ファイルの位置を、次のように指定してください。

```
% ./runInstaller [-silent] -responseFile filename
```

## 非問合せモードでのインストール

---

OUI を使用してサイレント・インストールを完全に行うには、`-silent` フラグを使用します。このフラグを使用してレスポンス・ファイルを構成しないと、OUI がインストールに失敗するので注意してください。インストールが成功したかどうかは、`/tmp` ディレクトリにある `silentInstall.log` ファイルに記録されます。

## エラー処理

OUI は、何も値が指定されていない不適当なコンテキスト、フォーマット、またはタイプ値を扱います。OUI セクション以外の変数は、無視されます。

## レスポンス・ファイルからの値の有効性のチェック

レスポンス・ファイルの計算および有効性のチェックは、OUI によってインストール時に行われます。有効性のチェックのプロセスが失敗すると、インストールは終了します。



# 4

---

## Oracle8i の構成

OUI セッションの終了後、特定のインストレーション後のタスクを実行し、Oracle8i を構成する必要があります。この章では、必須のタスクに加え、オプションのタスクも説明します。

- root ユーザーで行う構成タスク
- oracle ユーザーで行う構成タスク
- Oracle 製品のインストレーション後のタスク
- インストールしたドキュメントの表示

---

**注意：** この章では、基本構成だけを説明します。高度な構成および本番システムに必要な典型的なチューニングの詳細は、『Oracle8i for Intel UNIX (DG/UX Intel, SCO UnixWare, Solaris Intel) 管理者リファレンス』、その製品固有の管理ガイドおよびチューニング・ガイドを参照してください。

---

## root ユーザーで行う構成タスク

root ユーザーでログインして、次のタスクを行います。

- ☐ root.sh スクリプトを実行する
- ☐ その他の UNIX アカウントを作成する
- ☐ データベース・ファイルのセキュリティを検証する（オプション）
- ☐ データベースの起動および停止を自動化する

### ▶▶ root.sh スクリプトを実行する

OUI は、ORACLE\_HOME ディレクトリに root.sh スクリプトを作成し、root.sh スクリプトを実行するためのプロンプトを表示します。root ユーザーとしてログインしてそのスクリプトを実行すると、Oracle 製品に必要なファイルの権限が設定され、他の root 関連の構成アクティビティが実行されます。

```
# cd $ORACLE_HOME
# ./root.sh
```

Oracle Parallel Server をインストールした場合、クラスタ内のすべてのノードで root.sh スクリプトを実行する必要があります。

root.sh スクリプトは、アクションを実行する前に環境を確認するプロンプトを表示します。環境を再設定する必要がある場合は、root.sh スクリプトを中断してください。スクリプトを中断した場合は、そのスクリプトを再実行してください。OUI を再実行する必要はありません。root.sh が正常に実行された後、「OK」ボタンを選択し、インストレーションを続行します。root.sh スクリプトが正常に実行された後、「OUI」画面で「OK」ボタンを選択し、インストレーションを続行します。

インストールした製品に応じて、root.sh の進行状況を知らせるメッセージが表示されます。また、ユーザー名を入力するプロンプトが表示され、その他の指示も表示されます。

root.sh スクリプトによって、ローカル bin ディレクトリを指定するように要求されます。このディレクトリが存在していない場合は、root.sh がディレクトリを作成します。

### ▶▶ その他の UNIX アカウントを作成する

必要に応じて、システム管理者ユーティリティ（useradd）を使用して、その他の UNIX アカウントを作成します。システム上のそれぞれの DBA は、OSDBA グループにアカウントを持つ必要があります。

### ▶▶ データベース・ファイルのセキュリティを検証する（オプション）

アメリカの NCSC C2 またはヨーロッパの ITSEC E3 と同等のセキュリティ構成を持つ Oracle8i を使用するサイトは、Oracle ソフトウェアのインストレーションの整合性を確立するために、このタスクを行う必要があります。セキュリティが問題でない場合、このタスクは任意です。

SQL\*Plus を使用してデータ・ディクショナリ・ビューに問い合わせ、デフォルト・データベースのアカウントを表示します。データベースのアカウントは、OUI で選択された製品に基づいています。

```
sql> SELECT username from dba_users;
```

必要ない場合は、アカウントを削除してください。

多くのファイルは、データへの不当なアクセスから保護する必要があります。推奨するファイル・モードおよび所有者は、次のとおりです。

- `oracle` アカウントは、すべての共通システム・ファイルおよびインストール・ファイルを所有します。
- OSDBA グループは、すべての共通システム・ファイルおよびインストール・ファイルに対する読み込み、書き込みおよび実行権限を持ちます。
- OSDBA グループ以外のユーザーには、Oracle インストールのファイルまたはディレクトリへの書き込み権限を与えません。

表 4-1 に、Oracle ディレクトリおよびファイルへのアクセス権限を示します。これらの権限は、デフォルトで付与されており、変更する必要はありません。

**表 4-1 Oracle ディレクトリおよびファイルへのアクセス権限**

| ディレクトリ/ファイル                                                                                                | 権限                 | コメント                                                                                                                      |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| すべてのデータベース、REDO ログおよび制御ファイル（これらのファイルの拡張子は、通常 <code>.dbf</code> 、 <code>.log</code> および <code>.ctl</code> ） | 640<br>rw-r----    | データに対する任意のアクセスを保護するために、すべてのデータベース、REDO ログ・ファイルおよび制御ファイルは、 <code>oracle</code> アカウントおよび OSDBA グループだけが読み込みできればなりません。        |
| <code>\$ORACLE_HOME/bin/</code>                                                                            | 751<br>rwxr-x--x   | <code>oracle</code> ソフトウェア所有者が書き込みでき、すべてのユーザーが実行できればなりません。                                                                |
| <code>oracle</code> 実行ファイル、および次のネットワーク実行ファイル：<br><code>db snmp</code> および <code>tnsnr</code>               | 6751<br>rws-r-s--x | 実行したユーザーに関係なく、 <code>oracle</code> ユーザーおよび <code>dba</code> グループとして実行ファイルが実行されるように、「6」によって <code>setuid</code> ビットを設定します。 |
| その他すべての実行ファイル                                                                                              | 751<br>rwxr-x--x   | <code>oracle</code> ソフトウェア所有者が書き込みでき、すべてのユーザーが実行できればなりません。                                                                |

表 4-1 Oracle ディレクトリおよびファイルへのアクセス権限

| ディレクトリ/ファイル                                                                             | 権限                                           | コメント                                                                                                                 |
|-----------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| \$ORACLE_HOME/lib/                                                                      | 755<br>rwxr-xr-x                             | oracle ソフトウェア所有者が読み込み、書き込みおよび実行でき、すべてのユーザーが読み込みおよび実行できるディレクトリです。                                                     |
| \$ORACLE_HOME/lib/ 内のすべてのファイル                                                           | 644<br>rw-r--r--                             | oracle ソフトウェア所有者が読み込みおよび書き込みでき、他のすべてのユーザーが読み込みできるファイルです。                                                             |
| \$ORACLE_HOME/rdbms/log                                                                 | 751<br>rwxr-x--x                             | ログ・ファイルへのアクセスを oracle アカウントおよび OSDBA グループに制限します。                                                                     |
| \$ORACLE_HOME/sqlplus や \$ORACLE_HOME/rdbms などの製品サブディレクトリ                               | 751<br>rwxr-x--x                             | ログ・ファイルへのアクセスを oracle アカウントおよび OSDBA グループに制限します。                                                                     |
| \$ORACLE_HOME/sqlplus または \$ORACLE_HOME/rdbms 内のファイル                                    | 644<br>rw-r--r--                             | oracle ソフトウェア所有者が読み込みおよび書き込みでき、他のすべてのユーザーが読み込みできるファイルです。                                                             |
| \$ORACLE_HOME/network/trace                                                             | 777 または 730<br>rwxrwxrwx<br>または<br>rwx-wx--- | 開発時にトレース・ファイルを表示して作成する場合に、広範囲のアクセスができるように「777」に設定します。本番環境では、確実に OSDBA グループのメンバーだけがトレース・ファイルへのアクセス権を持つように「730」に設定します。 |
| \$ORACLE_HOME/rdbms/admin および \$ORACLE_HOME/sqlplus/admin などの、製品 admin ディレクトリ内のすべてのファイル | 644<br>-rw-r--r--                            | 通常、SQL スクリプトは SYS ユーザーで実行しなければなりません。                                                                                 |

## ▶ データベースの起動および停止を自動化する

この処理は、すべての Intel UNIX プラットフォームに共通です。この処理は、自動的に起動および停止させる新しいデータベースごとに完了しておく必要があります。システム起動時に dbstart および dbshut スクリプトを実行する手順は、次のとおりです。

1. Solaris Intel および SCO UnixWare プラットフォームの場合、  
/var/opt/oracle/oratab ファイルを編集します。DG/UX Intel プラットフォームの場合は、/etc/oratab ファイルを編集します。

oratab ファイルのデータベース・エントリは、次の形式で表示されます。

```
ORACLE_SID:ORACLE_HOME:{Y|N}
```

この場合、Y または N は、dbstart および dbshut スクリプトを使用してデータベースを起動および停止するかどうかを示します。

2. 起動するすべてのデータベースのエントリを検索します。これらのエントリは、先頭フィールドの *sid* で識別されます。それぞれの最後のフィールドを Y に変更します。
3. /etc/init.d ディレクトリに、dbora という名前のファイルを作成します（まだ存在していない場合）。
4. dbora ファイルの終わりに、次のように入力します（まだ存在していない場合）。必ず、dbstart ユーティリティのフルパスを指定してください。

```
#!/bin/sh
# Set ORA_HOME to be equivalent to the ORACLE_HOME
# from which you wish to execute dbstart and
# dbshut
# set ORA_OWNER to the user id of the owner of the
# Oracle database in ORA_HOME
ORA_HOME=/u01/app/oracle/product/8.1.5
ORA_OWNER=oracle
if [! -f $ORA_HOME/bin/dbstart]
then
echo "Oracle startup: cannot start"
exit
fi
case "$1" in
'start')

# Start the Oracle databases:
# The following command assumes that the oracle login will not prompt the
# user for any values

su - $ORA_OWNER -c $ORA_HOME/bin/dbstart &
;;
'stop')

# Stop the Oracle databases:
# The following command assumes that the oracle login will not prompt the
# user for any values

su - $ORA_OWNER -c $ORA_HOME/bin/dbshut &
;;
esac
```

5. 次のように入力して、dbora をリンクします。

```
# ln -s /etc/init.d/dbora /etc/rc0.d/K10dbora
# ln -s /etc/init.d/dbora /etc/rc2.d/S99dbora
```

dbstart および dbshut スクリプトは \$ORACLE\_HOME/bin ディレクトリにあり、クリーンなデータベースの起動および停止を自動化する場合に使用します。適切なシステム起動および停止ファイルの中のスクリプトをコールすることで、データベースの起動と停止のプロセスを自動化します。

データベースの起動と停止を自動化するためには、dbstart および dbshut スクリプトが同一のデータベース・セットに適用されるようにします。これは、各スクリプトが /var/opt/oracle/oratab ファイルの同一エントリを参照するためです。たとえば、dbstart を使用してデータベース *sid1*、*sid2* および *sid3* を起動し、dbshut を使用して *sid1* および *sid2* だけを停止することはできません。

dbstart をまったく使用せずに、dbshut でデータベース・セットを停止するには指定できます。そのように指定するには、停止ファイルに dbshut エントリを追加し、システム起動ファイルから dbstart エントリを削除してください。システムが起動するたびにデータベースを自動的に起動する必要がない場合は、この方法を使用します。

データベースが起動する (dbstart) 前に他の起動処理 (ファイル・システムのマウントなど) が実行されるようにします。

データベースが停止した (dbshut) 後で他の停止処理 (ファイル・システムのアンマウントなど) が実行されるようにします。

## oracle ユーザーで行う構成タスク

oracle ユーザーでログインして、次のタスクを行います。

- ☐ UNIX アカウント起動ファイルを更新する
- ☐ oratab ファイルを更新する
- ☐ 必要な Oracle パッチを適用する
- ☐ 初期化パラメータを設定する

### ▶ UNIX アカウント起動ファイルを更新する

oracle アカウントおよび Oracle ユーザーの UNIX アカウントの起動ファイルを更新します。

#### 環境変数の設定

Oracle8i 製品を使用する前に、oracle アカウントの .profile または .login ファイルに次の環境変数を設定します。表 4-2 に、OUI のデフォルト値（すでに変更されている場合もある）を示します。環境変数を設定する構文は次のとおりです。

Bourne または Korn シェルの場合は、次のように入力します。

```
variable_name=value; export variable_name
```

C シェルの場合は、次のように入力します。

```
setenv variable_name value
```

---

**注意：** 環境変数に、Oracle プロセスで使用される名前（たとえば、CKPT、PMON、DBWR など）と同じ名前は設定しないでください。

---

#### CLASSPATH

CLASSPATH は、Java の機能で使用されます。CLASSPATH は、製品によって異なります。詳細は、製品のドキュメントを参照してください。

#### LD\_LIBRARY\_PATH

共有ライブラリを使用する Oracle 製品を使用する場合に必要です。LD\_LIBRARY\_PATH には、\$ORACLE\_HOME/lib を含めて設定します。

### ORACLE\_BASE

Oracle ソフトウェアおよび管理ファイル構造の一番上にあるディレクトリを指定します。  
OFA 推奨値は、*software\_mount\_point/app/oracle* (例: /u01/app/oracle) です。

### ORACLE\_HOME

特定リリースの Oracle ソフトウェアをインストールするディレクトリを指定します。  
OFA 推奨値は、*\$ORACLE\_BASE/product/release*  
(例: /u01/app/oracle/product/8.1.5) です。

### ORACLE\_SID

Oracle システム識別子、または *sid* (Oracle Server インスタンスの名前) を指定します。  
*sid* は多くのファイル名に組み込まれるので、他のシステムでファイル名の問題が起きるのを回避するために、4 文字以内で設定してください。

### PATH

検索パスに、次のすべてが設定されていることを確認してください。

- *\$ORACLE\_HOME/bin*、*/bin*、*/usr/bin* および */usr/ccs/bin*
- ローカル bin ディレクトリである */usr/local/bin*  
(このディレクトリは、OUI によって自動的に作成される)

---

**注意：** 検索パスに */usr/ucb* を入れる場合は、*/usr/ccs/bin* の後に指定してください。

---



表 4-2 環境変数のデフォルト設定

| 環境変数            | デフォルト設定                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |
|-----------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| CLASSPATH       | CLASSPATH には、デフォルト設定はありません。次のパスを含めてください。<br><br><i>JRE_Location</i> , \$ORACLE_HOME/jlib,<br>\$ORACLE_HOME/product/jlib<br><br><b>注意:</b> <i>JRE_Location</i> は、oraInventory/./jre/1.1.7 として定義されています。この oraInventory ディレクトリは、<br>/var/opt/oracle/oraInst.loc (DG/UX Intel の場合、<br>/etc/oraInst.loc) ファイルでパスが指定されています。 |
| LD_LIBRARY_PATH | LD_LIBRARY_PATH には、デフォルト設定はありません。<br>\$ORACLE_HOME/lib を含めて設定してください。                                                                                                                                                                                                                                                  |
| ORACLE_BASE     | <i>software_mount_point/app/oracle</i>                                                                                                                                                                                                                                                                                |
| ORACLE_HOME     | \$ORACLE_BASE/product/8.1.5                                                                                                                                                                                                                                                                                           |
| ORACLE_SID      | ORACLE_SID には、デフォルト設定はありません。入力した値を覚えていない場合は、OUI ログ・ファイルの一覧から検索できます。                                                                                                                                                                                                                                                   |
| PATH            | PATH には、デフォルト設定はありません。必ず新しい<br>\$ORACLE_HOME/bin ディレクトリを含めてください。その他の要件の詳細は、第 2 章「環境設定」を参照してください。                                                                                                                                                                                                                      |

### oraenv (coraenv) スクリプトの初期化

oraenv または coraenv スクリプトを使用するオプションで、Oracle ユーザーの共通環境を設定できます。次の指示に従って、oraenv スクリプト (C シェルを実行している場合は coraenv スクリプト) に対して、単一インスタンスまたは複数インスタンスを構成してください。

#### 単一インスタンスのマシン

単一インスタンスのマシンでは、oraenv (coraenv) ファイルを初期化するために、oracle アカountの .profile または .login ファイルの最後に次の記述を含めます。

Bourne または Korn シェルの場合は、次のように入力します。

```
ORAENV_ASK=NO
. /usr/local/bin/oraenv
```

C シェルの場合は、次のように入力します。

```
set ORAENV_ASK = NO
source /usr/local/bin/coraenv
unset ORAENV_ASK
```

### 複数インスタンスのマシン

複数インスタンスのマシンでは、oraenv (coraenv) ファイルを初期化するために、oracle アカウントの起動ファイルの最後にインスタンス名およびコマンドの一覧を含めます。OUI セッションの前に定義した ORACLE\_SID 値が、デフォルトのインスタンス名になります。

Bourne または Korn シェルの場合は、次のように入力します。

```
#!/bin/sh
SIDLIST=`awk -F: '/^[^#]/{printf "%s",$1} '/var/opt/oracle/oratab`
echo "SIDs on this machine are $SIDLIST"
ORAENV_ASK=
. /usr/local/bin/oraenv
```

C シェルの場合は、次のように入力します。

```
set sidlist=`awk -F: '/^[^#]/{printf "%s",$1} '/var/opt/oracle/oratab`
echo "SIDs on this machine are $sidlist"
unset ORAENV_ASK sidlist
source /usr/local/bin/coraenv
```

### 他の Oracle ユーザー起動ファイルの更新

すべての Oracle ユーザーに対して同一の環境を作成するため、次のように各ユーザー起動ファイルを更新します。

- PATH 文に ORACLE\_HOME/bin を指定します。
- 起動ファイルの最後に次の行を入力します。  
    . /usr/local/bin/oraenv  
    (C シェル・ユーザーの場合は、source /usr/local/bin/coraenv)
- ORACLE\_BASE および ORACLE\_HOME を設定します。

### ▶▶ oratab ファイルを更新する

Database Configuration Assistant (DBCA) を使用するかわりに手動でデータベースを作成した場合は、システム構成が /var/opt/oracle/oratab ファイルに反映されていることを確認する必要があります。(DG/UX Intel の場合は、/etc/oratab ファイルにシステム構成が反映されていることを確認する必要があります。)

システム上の Server インスタンスごとに、次の形式でエントリを追加します。

```
ORACLE_SID:ORACLE_HOME:{Y|N}
```

この場合、Y または N は、dbstart および dbshut スクリプトを実行するかどうかを示します。DBCA は、作成したそれぞれのデータベースに対してエントリを自動的に追加します。

## 必要 Oracle パッチを適用する

このマニュアルが添付されている Oracle8i リリースには、Oracle8i または他の製品に適用する必要があるパッチが提供されている場合があります。パッチは、製品 CD-ROM の `/cd_rom_mount_point/patch` ディレクトリにあります。インストールの説明は、それぞれのパッチに提供されている README ファイルを参照してください。

## 初期化パラメータを設定する

デフォルトの `initSID.ora` ファイルは、配布から `$ORACLE_BASE/admin/SID/pfile` ディレクトリにコピーされています。テンプレートの `initSID.ora` ファイルは、`$ORACLE_HOME/dbs` ディレクトリにも含まれています。そのファイルには、大、中、小規模のデータベースの設定、および大、中規模のデータベースについてのコメントが含まれています。サイズの設定には相互関係がありますが、データベースの実際のサイズを示しているものではありません。

### initSID.ora ファイルのパラメータの変更

DBCA を使用してデータベースを作成する場合、`initSID.ora` ファイルのパラメータは自動的に設定されます。`initSID.ora` ファイルの初期化パラメータは、UNIX テキスト・エディタで変更できます。変更した `initSID.ora` ファイルは、データベースを停止して再起動するとアクティブになります。

パラメータ・ファイルの `ORACLE_HOME` には、疑問符 (?) などの記号文字を使用しないでください。

データベース起動時に、ロールバック・セグメントを自動的にオンラインにするには、`initSID.ora` ファイルの `rollback_segments` 行のコメントを解除する必要があります。

次に変更例を示します。

```
#rollback_segments = (r0, r1, r2, r3)
```

前述の行を次のように変更します。

```
rollback_segments = (r0, r1, r2, r3)
```

**参照:** `initsid.ora` ファイルのパラメータの詳細は、『Oracle8i for Intel UNIX (DG/UX Intel, SCO UnixWare, Solaris Intel) 管理者リファレンス』を参照してください。

## Oracle 製品のインストール後のタスク

必要に応じて、インストールに対してこの項に示す製品固有のタスクを行います。すべての製品にインストール後の設定が必要なわけではありません。

Oracle インストールを構成する前にオンライン・ドキュメントを表示する場合は、4-19 ページを参照してください。このマニュアルで説明している構成タスクを完了するために、製品ドキュメントを読む必要はありません。ただし、高度なチューニングを実行する場合は、製品ドキュメントの情報が必要になります。

次の製品には、インストール後のタスクを行います。

- ☐ Oracle オプションのインストール後のタスク
- ☐ Oracle8i Recovery Manager のインストール後のタスク
- ☐ Oracle Parallel Server Management のインストール後のタスク
- ☐ Oracle プリコンパイラのインストール後のタスク
- ☐ Net8 のインストール後のタスク
- ☐ Oracle Names Server のインストール後のタスク (オプション)
- ☐ Oracle Supported Protocol のインストール後のタスク

### ▶▶ Oracle オプションのインストール後のタスク

---

**注意:** 前回リリースの ConText Cartridge から Oracle *interMedia* Text 8.1 へのアップグレードはありません。ただし、手動で移行することはできます。手動で移行する手順の詳細は、『Oracle8i *interMedia* Text 移行ガイド』を参照してください。

---

Oracle *interMedia* Text をインストールする場合は、データ・ディクショナリとして使用できるディスク領域が 10MB 以上あることを確認します。

Oracle *interMedia Text* のデフォルトおよびテンポラリ表領域として使用できる表領域があることを確認します。Oracle *interMedia Text* は、デフォルトおよびテンポラリ表領域として DRSYS 表領域を使用します。Oracle *interMedia Text* として使用できる表領域がない場合、または DRSYS 表領域を使用しない場合は、作業を進める前にその他の表領域を作成します。

**参照：** 表領域作成の詳細は、『Oracle8i SQL リファレンス』を参照してください。

1. 次のディレクトリにある dbassist を実行して、Database Configuration Assistant (DBCA) を起動します。

```
$ORACLE_HOME/bin/dbassist
```

2. 「Modify Database」を選択します。

DBCA によって検出された一覧から適切なデータベースの SID を選択します。変更するデータベースは、すでに起動されている必要があります。

3. 一覧から使用するオプションを選択し、「Finish」ボタンをクリックします。

すべてのオプションおよびパッケージの実行権限は、PUBLIC に与えられます。

## ■ Oracle8i Recovery Manager のインストール後のタスク

Recovery Manager は、Oracle8i の一部としてインストールされる、自動化されたリカバリ・ユーティリティです。このユーティリティでは、別の Oracle8i データベースのリカバリ・カタログに情報を格納します。最大フォルト・レジスタンスを提供するために、この 2 番目の Oracle8i を別のマシンにインストールしてください。

---

**注意：** 2 番目の Oracle8i データベースをインストールおよび管理できない場合は、Recovery Manager をリカバリ・カタログなしの制限モードでも使用できます。

---

リカバリ・カタログを作成する場合は、次の手順に従ってください。

1. すでに Oracle8i がインストールされているシステムは別のマシンに Oracle8i をインストールし、リカバリ・カタログのデータベースを作成します。

カスタム・スクリプトを書き込まずにデータベースを作成する場合は、OUI でデフォルトのデータベースを作成します。このデフォルトのデータベースは、リカバリ・カタログに適しています。

2. リカバリ・カタログ・データベースに、RECOVERY\_CATALOG\_OWNER になるユーザーを作成します。
3. RECOVERY\_CATALOG\_OWNER としてログインし、Recovery Manger プロンプトで createCatalog コマンドを実行します。

## ▶▶ Oracle Parallel Server Management のインストール後のタスク

1. マシンを再起動する際に OPSD (Oracle Parallel Server Communication Daemon) を自動的に起動するには、root ユーザーでログインし、システム起動ファイルに次の行を追加します。

```
su - oracle -c "opsd log=/tmp/opsd.log"
```

前述のエントリはオプションです。デフォルトは次のとおりです。

```
/tmp/opsdlog
```

Intel UNIX の場合、起動ファイルは、/etc/init.d/dbora です。

2. 次のように入力して、クラスタ内にあるすべてのノードのノード番号を決めます。

```
$ORACLE_HOME/psm/utl/getnodelist -a"
```

3. OPS 構成ファイル \$ORACLE\_HOME/ops/opsname.conf を作成し、各ノード上にインストールします。このファイルには、OPS インスタンスの構成および関連サービスを表示するパラメータが記述されています。

**参照：** 詳細は、『Oracle Parallel Server Management Configuration Guide for UNIX』を参照してください。このドキュメントを参照するには、ブラウザで \$ORACLE\_HOME/psm/doc/opsmsrv.htm を表示します。

## ▶▶ Oracle プリコンパイラのインストール後のタスク

---

**注意：** 埋込み PL/SQL を変換するために、Oracle8i とは関係なく Oracle プリコンパイラを使用しないでください。

---

**Pro\*C/C++**

\$ORACLE\_HOME/precomp/admin にある構成ファイル ottcfg.cfg および pcscfg.cfg は、Pro\*C/C++ を使用する前に環境に合わせてカスタマイズする必要があります。このファイルの構成方法は、ご使用の C コンパイラのドキュメントを参照してください。

**参照：** ご使用の環境で pcscfg.cfg ファイルを構成する場合は、『Pro\*C/C++ プリコンパイラ・プログラマーズ・ガイド』を参照してください。

**Pro\*COBOL**

構成ファイルは、pcbcfg.cfg です。空のファイルがインストールされ、ご使用のサイト固有の要件に応じてテキスト・エディタを使用して構成できます。このファイルを構成する方法は、Micro Focus COBOL のドキュメントを参照してください。

**Net8 のインストール後のタスク**

Oracle ネットワークの構成の詳細は、『Oracle8i Net8 管理者ガイド』を参照してください。Net8 Server または Net8 Client がインストールされている場合、Net8 Configuration Assistant が自動的に起動され、次のように Net8 の初期構成が行われます。

1. Oracle8i をインストールしている場合、Net8 Assistant は、自動的に sqlnet.ora という名前のプロファイル、および listener という名前のリスナーを作成します。このリスナーは、ユーザーが選択したプロトコル・サポートに一致するエンドポイントをリスニングします。多くの場合、これはポート番号 1521 を使用している TCP/IP プロトコルをリスニングすることになります。大部分の複雑な環境では、これは、構成する必要のあるリスナーのみになります。リスナーは、Net8 Configuration Assistant によって自動的に起動されます。インストールの後にリスナーの状態をチェックする場合は、次のようにコマンドを入力します。

```
$ lsnrctl status
```

リスナーが実行中の場合は、lsnrctl status コマンドによって次のように出力されます。

```
Connecting to (ADDRESS=(PROTOCOL=IPC) (KEY=PNPKEY))
STATUS of the LISTENER
-----
Alias                     listener
Version                   TNSLSNR for SVR4: Version 8.1.5.0.0 - Production
...
```

リスナーが停止している場合は、次のように入力して、リスナーを起動します。

```
$ lsnrctl start listener
```

2. root としてログインし、/etc/services ファイルに次のように入力して、Net8 リスナーのポートを予約します。

```
listener 1521/tcp          #Net8 listener
```

インストール中またはインストール後に、Database Configuration Assistant を使用してデータベースを作成する場合、Database Configuration Assistant はリスナー構成を自動的に更新し、新しいデータベースに必要な構成情報を追加します。このファイルは、Oracle8i データベースに接続するクライアントのマシンに配布されます。

Oracle8i クライアントを別々にインストールする場合、Net8 Configuration Assistant は、インストール中に選択した項目に一致するプロファイルを自動的に作成します。OUI は、Net8 Easy Configuration ウィザードを自動的に実行します。このウィザードは、クライアント・インストールの \$ORACLE\_HOME/network/admin ディレクトリにある Local Naming ファイルで、ネット・サービス名を構成する手助けをします。

インストール終了後に、Net8 Assistant を使用してより詳細に構成することができます。Net8 Assistant は、次のように入力して実行します。

```
$ netasst
```

Net8 Easy Configuration も、次のように入力すると実行できます。

```
$ netec
```

**参照：** Net8 の使用および構成の詳細は、『Oracle8i Net8 管理者ガイド』を参照してください。

3. Net8 Assistant が tnsnames.ora ファイルを作成した後、クライアント・マシン側の \$ORACLE\_HOME/network/admin ディレクトリにある既存の tnsnames.ora ファイルに、内容を追加します。
4. SQL\*Plus をクライアント・マシンにインストールし、サーバーへの接続をテストするために SQL\*Plus を起動します。

```
$ sqlplus username/password@service_name
```

この時点で、TCP/IP を介したネットワーク接続を確立できました。さらに高度なネットワーク構成の詳細は、『Oracle8i Net8 管理者ガイド』を参照してください。



## ▶▶ Oracle Names Server のインストール後のタスク（オプション）

Oracle Names Server は、Net8 で自動的にインストールされます。ネットワークを構成して Oracle Names Server を使用する場合は、次の手順に従ってください。

1. Net8 Assistant を使用して、Oracle Names 構成ファイル `sqlnet.ora` および `names.ora` を作成します。
2. 既存の Names Server を使用する場合は、すべてのネットワーク・ノードの `/etc/hosts` ファイルに別名が正しく指定されていることを確認します。
3. マシンをサーバーとして使用している場合は、次のように入力して、Names Server プロセスを起動します。

```
$ namesctl startup
```

4. 次のように入力して、Names Server プロセスを確認します。

```
$ namesctl status
```

## ▶▶ Oracle Supported Protocol のインストール後のタスク

### すべての Supported Protocol

プロトコルをインストールした後、次のタスクを行います。

1. ネットワークに必要な構成ファイルを作成およびインストールしたことを確認します。

### リスナーの起動および停止の自動化

この処理は、すべての Intel UNIX プラットフォームに共通です。この処理は、自動的に起動および停止させる新しいデータベースごとに完了しておく必要があります。システム起動時に `dbstart` および `dbshut` スクリプトを実行する手順は、次のとおりです。

1. Solaris Intel および SCO UnixWare プラットフォームの場合、`/var/opt/oracle/oratab` ファイルを編集します。DG/UX Intel プラットフォームの場合、`/etc/oratab` ファイルを編集します。

`oratab` ファイルのデータベース・エントリは、次の形式で表示されます。

```
ORACLE_SID:ORACLE_HOME:{Y|N}
```

この場合、Y または N は、`dbstart` および `dbshut` スクリプトを使用してデータベースを起動および停止するかどうかを示します。

2. 起動するすべてのデータベースのエントリを検索します。これらのエントリは、先頭フィールドの `sid` で識別されます。それぞれの最後のフィールドを Y に変更します。

3. /etc/init.d ディレクトリに、dbora という名前のファイルを作成します（まだ存在していない場合）。
4. dbora ファイルの終わりに、次のように入力します（まだ存在していない場合）。必ず、dbstart ユーティリティのフルパスを指定してください。

```
#!/bin/sh
# Set ORA_HOME to be equivalent to the ORACLE_HOME
# from which you wish to execute dbstart and
# dbshut
# set ORA_OWNER to the user id of the owner of the
# Oracle database in ORA_HOME
ORA_HOME=/u01/app/oracle/product/8.1.5
ORA_OWNER=oracle
if [! -f $ORA_HOME/bin/tnslsnr -o ! -f $ORA_HOME/bin/lsnrctl];
then
echo "Listener startup: cannot start"
exit
fi
case "$1" in
'start')

# Start the Oracle databases:
# The following command assumes that the oracle login will not prompt the
# user for any values

su - $ORA_OWNER -c $ORA_HOME/bin/lsnrctl start
;;
'stop')

# Stop the Oracle databases:
# The following command assumes that the oracle login will not prompt the
# user for any values

su - $ORA_OWNER -c $ORA_HOME/bin/lsnrctl stop
;;
esac
```

5. 次のように入力して、dbora をリンクします。

```
# ln -s /etc/init.d/dbora /etc/rc0.d/K10dbora
# ln -s /etc/init.d/dbora /etc/rc2.d/S99dbora
```

---

**注意：** `oracle` アカウントの `.profile` または `.login` ファイルに `TNS_ADMIN` 環境変数が設定されていない場合、または `listener.ora` がデフォルト位置 (`/var/opt/oracle` または `$ORACLE_HOME/network/admin`) にない場合、この操作はできません。

---

6. クライアント / サーバー構成の場合は、クライアント側の `TWO_TASK` 環境変数をサーバーを指すように設定します。クライアント・マシンの `TWO_TASK` 環境変数をサーバーのサービス名に設定してください (`tnsnames.ora` ファイルで設定できます)。

7. 次のように入力して、サーバーのリスナー・プロセスを起動します。

```
$ lsnrctl start
```

8. 次のように入力して、リスナー・プロセスを確認します。

```
$ lsnrctl status
```

9. ループバックとの接続をテストするには、`oracle` ユーザーとしてログインし、次のように入力して `SQL*Plus` を起動します。

```
$ sqlplus username/password@service_name
```

### Secure Socket Layer の構成

Secure Socket Layer (SSL) がすでにインストールされている場合、ご使用のシステムを適切に構成するため、Net8 Configuration Assistant を実行する必要があります。

**参照：** SSL の詳細は、『Oracle8i Advanced Security 管理者ガイド』の第9章「SSL 認証の構成」を参照してください。

## インストールしたドキュメントの表示

ドキュメントは、HTML、PDF (Adobe Portable Document Format、表示するには Acrobat Reader が必要)、または両方の形式でインストールできます。Intel UNIX 固有のドキュメント・ファイルは、Oracle8i CD-ROM からインストールできます。共通ドキュメント・ファイルは、Online Generic Documentation CD-ROM からインストールできます。ドキュメント・ファイルの位置は、次の規則に従って決定されます。

## インストールしたドキュメントの表示

---

- 現行の環境に ORACLE\_DOC が定義されている場合、OUI はそこにファイルをインストールします。
- ORACLE\_DOC は定義されていないが、ORACLE\_BASE が定義されている場合、OUI は \$ORACLE\_BASE/doc ディレクトリにファイルをインストールします。
- 現行の環境に ORACLE\_DOC または ORACLE\_BASE のどちらも定義されていない場合、OUI は \$ORACLE\_HOME/doc ディレクトリにファイルをインストールします。

ドキュメントを参照するには、index.htm または products.htm のいずれかをオープンします。index.htm ファイルにはフレーム表示可能なブラウザが必要です。products.htm ファイルは、フレーム表示可能なブラウザを必要としません。

CD-ROM から直接ドキュメントを表示することもできます。

**参照：** CD-ROM からのドキュメント表示の詳細は、『Oracle8i CD-ROM Insert』を参照してください。

## Oracle Information Navigator

Oracle Information Navigator は、Oracle ドキュメント CD-ROM で提供される Java ベースの検索およびナビゲーション・ユーティリティです。Java が使用できるブラウザを使用すれば、index.htm ファイルをオープンすると、Information Navigator が自動的に起動されます。Information Navigator は、CD-ROM から参照するか、インストールしたファイルから参照するかにかかわらず、Oracle 製品ドキュメントで使用できます。

---

## 各国語サポート

この付録では、Oracle 製品がサポートしているソート順、キャラクタ・セット、言語および地域を説明します。この付録では、Oracle の各国語サポート（NLS）の詳細は説明していません。

**参照：** 各国語サポートの詳細は、『Oracle8i 概要』および『Oracle8i NLS ガイド』を参照してください。

- サポートしているソート順
- サポートしているキャラクタ・セット
- サポートしている言語および地域

## サポートしているソート順

言語は、次の順でソートできます。

|         |             |           |               |
|---------|-------------|-----------|---------------|
| Arabic  | German_Din  | Italian   | Spanish       |
| Czech   | XGerman     | Latin     | XSpanish      |
| Danish  | XGerman_Din | Norwegian | Swedish       |
| XDanish | Greek       | Polish    | Swiss         |
| Dutch   | Hebrew      | Russian   | Turkish       |
| Finnish | Hungarian   | Slovak    | Turkish       |
| German  | Icelandic   | XSlovak   | West_European |

## サポートしているキャラクタ・セット

Oracle NLS は、次に示す 7 ビット、8 ビットおよびマルチバイトのキャラクタ・セットをサポートしています。

### 7 ビット・キャラクタ・セット

|                |                              |
|----------------|------------------------------|
| US7ASCII       | U.S.7 ビット ASCII (デフォルト)      |
| D7DEC          | DEC ドイツ語 7 ビット               |
| F7DEC          | DEC フランス語 7 ビット              |
| S7DEC          | DEC スウェーデン語 7 ビット            |
| E7DEC          | DEC スペイン語 7 ビット              |
| AR7ASMO449PLUS | アラビア語 / ラテン語 ASMO-Plus 7 ビット |
| TR7DEC         | DEC トルコ 7 ビット                |
| SF7ASCII       | フィンランド語 7 ビット ASCII 拡張       |
| NDK7DEC        | DEC ノルウェー語 / デンマーク語 7 ビット    |
| I7DEC          | DEC イタリア語 7 ビット              |
| NL7DEC         | DEC オランダ語 7 ビット              |
| CH7DEC         | DEC スイス語 7 ビット               |
| SF7DEC         | DEC フィンランド語 7 ビット            |

## 8 ビット・キャラクタ・セット

|               |                                                 |
|---------------|-------------------------------------------------|
| US8ICL        | ICL EBCDIC 8 ビット US                             |
| WE8ICL        | ICL EBCDIC 8 ビット西ヨーロッパ                          |
| EE8PC853      | IBM PC 8 ビット東ヨーロッパ - コード・ページ 853                |
| LT8PC772      | IBM PC 8 ビット・リトアニア - コード・ページ 772                |
| LT8PC774      | IBM PC 8 ビット・リトアニア - コード・ページ 774                |
| DK8EBCDIC277  | EBCDIC 8 ビット・デンマーク - コード・ページ 277                |
| WE8DEC        | DEC 西ヨーロッパ 8 ビット                                |
| WE8HP         | HP 8 ビット西ヨーロッパ                                  |
| US8PC437      | IBM PC 8 ビット U.S. - コード・ページ 437                 |
| WE8EBCDIC37   | EBCDIC 8 ビット西ヨーロッパ - コード・ページ 37                 |
| WE8EBCDIC500  | EBCDIC 8 ビット西ヨーロッパ - コード・ページ 500                |
| EL8EBCDIC875  | EBCDIC 8 ビット・ギリシャ - コード・ページ 875                 |
| WE8PC850      | IBM PC 8 ビット西ヨーロッパ - コード・ページ 850<br>(HFT 端末で使用) |
| WE8ISO8859P1  | ISO 8859-1 西ヨーロッパ 8 ビット                         |
| EE8ISO8859P2  | ISO 8859-2 東ヨーロッパ 8 ビット                         |
| SE8ISO8859P3  | ISO 8859-3 南ヨーロッパ 8 ビット                         |
| CL8ISO8859P5  | ISO 8859-5 キリル 8 ビット                            |
| CL8MSWIN1251  | Windows キリル 8 ビット<br>(CL8MSWINDOW31 に替わるもの)     |
| CLMACCYRILLIC | Mac キリル 8 ビット                                   |
| EL8ISO8859P7  | ISO 8859-7 ラテン / ギリシャ 8 ビット                     |
| IW8ISO8859P8  | ISO 8859-8 ラテン / ヘブライ (Iwriet) 8 ビット            |
| WE8ISO8859P9  | ISO 8859-9 西ヨーロッパ / トルコ 8 ビット                   |
| EL8DEC        | DEC ラテン / ギリシャ 8 ビット                            |
| TR8DEC        | DEC トルコ 8 ビット                                   |
| EL8PC437S     | IBM-PC アメリカ / ギリシャ・キャラクタ・セット                    |
| EEC8EUROPA3   | EEC の EUROPA3 西ヨーロッパ / ギリシャ 8 ビット・<br>キャラクタ・セット |

## サポートしているキャラクタ・セット

---

|                |                                                  |
|----------------|--------------------------------------------------|
| RU8BESTA       | ラテン / キリル BESTA 8 ビット                            |
| RU8PC866       | IBM-PC ラテン / キリル 8 ビット - コード・ページ 866             |
| RU8PC855       | IBM-PC ラテン / キリル 8 ビット - コード・ページ 855             |
| D8EBCDIC273    | EBCDIC 8 ビット・オーストリア / ドイツ - コード・ページ 273/1        |
| I8EBCDIC280    | EBCDIC 8 ビット・イタリア - コード・ページ 280/1                |
| N8PC865        | IBM PC 8 ビット・ノルウェー - コード・ページ 865                 |
| TH8TISASCII    | タイ工業規格 620-2533 ASCII 8 ビット                      |
| TH8TISEBCDIC   | タイ工業規格 620-2533 EBCDIC 8 ビット                     |
| TR8PC857       | IBM-PC トルコ 8 ビット - コード・ページ 857                   |
| NEE8ISO8859P4  | ISO 8859-4 北および北東ヨーロッパ                           |
| AR8ISO8859P6   | ISO 8859-6 ラテン / アラブ                             |
| AR8ASMO708PLUS | アラブ / ラテン ASMO-Plus 8 ビット<br>(格納キャラクタ・セットとしては無効) |
| TR8ISO8859P9   | トルコ版 ISO 8859-9 西ヨーロッパ                           |

## マルチバイト・キャラクタ・セット

|                  |                       |
|------------------|-----------------------|
| JA16VMS          | 日本語 VMS 漢字            |
| JA16EUC          | 日本語拡張 UNIX コード        |
| JA16EBCDIC930    | 日本語                   |
| JA16SJIS         | 日本語シフト JIS            |
| JA16DBCS         | 日本語 IBM               |
| KO16KSC5601      | 韓国語 KSC5601           |
| KO16DBCS         | 韓国語 IBM               |
| ZHS16CGB231280   | 中国語 GB2312-80         |
| ZHS16GBK         | 中国語 GBK               |
| ZHT32CNS11643-86 | 台湾中国語 (繁体字)           |
| ZHT16BIG5        | BIG5 中国語 (繁体字)        |
| ZHT32EUC         | 中国語 (繁体字) 拡張 UNIX コード |



## サポートしている言語および地域

表 A-1 に、言語、地域およびそれらに対応する NLS 値を示します。また、言語 / 地域の組合せごとに推奨するキャラクタ・セットも示します。

**表 A-1 言語、地域および推奨するキャラクタ・セット**

| 言語              | NLS 値                     | 地域            | NLS 値                     | 推奨する<br>キャラクタ・セット |
|-----------------|---------------------------|---------------|---------------------------|-------------------|
| アメリカ英語          | american                  | アメリカ合衆国       | america                   | US7ASCII          |
| アラビア語           | arabic                    | アラブ首長国<br>連邦  | "united arab<br>emirates" | AR8ISO8859P6      |
| ブラジル・<br>ポルトガル語 | "brazilian<br>portuguese" | ブラジル          | brazil                    | WE8DEC            |
| カナダ・<br>フランス語   | frc                       | カナダ<br>(ケベック) | frc                       | WE8DEC            |
| チェコ語            | czech                     | チェコ           | czechoslovakia            | EE8ISO8859P2      |
| デンマーク語          | danish                    | デンマーク         | denmark                   | WE8DEC            |
| オランダ語           | dutch                     | オランダ          | "the netherlands"         | WE8DEC            |
| フィンランド語         | finnish                   | フィンランド        | finland                   | WE8DEC            |
| フランス語           | french                    | フランス          | france                    | WE8DEC            |
| ドイツ語            | german                    | ドイツ           | germany                   | WE8DEC            |
| ギリシャ語           | greek                     | ギリシャ          | greece                    | EL8DEC            |
| ハンガリー語          | hungarian                 | ハンガリー         | hungary                   | WE8ISO8859P2      |
| アイスランド語         | is                        | アイスランド        | is                        | WE8ISO8859P1      |
| イタリア語           | italian                   | イタリア          | italy                     | WE8DEC            |
| 日本語             | japanese                  | 日本            | japan                     | JA16EUC           |
| 韓国語             | korean                    | 韓国            | korea                     | KO16KSC5601       |
| リトアニア語          | lt                        | リトアニア         | lt                        | NEE8ISO8859P4     |
| メキシコ・<br>スペイン語  | esm                       | メキシコ          | esm                       | WE8DEC            |
| ノルウェー語          | norwegian                 | ノルウェー         | norway                    | WE8DEC            |
| ポーランド語          | polish                    | ポーランド         | poland                    | EE8ISO8859P2      |

表 A-1 言語、地域および推奨するキャラクタ・セット (続き)

| 言語        | NLS 値                    | 地域     | NLS 値    | 推奨する<br>キャラクタ・セット |
|-----------|--------------------------|--------|----------|-------------------|
| ポルトガル語    | portuguese               | ポルトガル  | portugal | WE8DEC            |
| ロシア語      | russian                  | CIS    | cis      | CL8ISO8859P2      |
| 中国語 (簡体字) | "simplified<br>chinese"  | 中国     | china    | ZHS16CGB231280    |
| スロバキア語    | slovak                   | スロバキア  | slovakia | EE8ISO8859P2      |
| スペイン語     | spanish                  | スペイン   | spain    | WE8DEC            |
| スウェーデン語   | swedish                  | スウェーデン | sweden   | WE8DEC            |
| タイ語       | th                       | タイ     | th       | TH8TISASCII       |
| 中国語 (繁体字) | "traditional<br>chinese" | 台湾     | taiwan   | ZHT32EUC          |
| トルコ語      | turkish                  | トルコ    | turkey   | WE8ISO8859P9      |

# 索引

## 数字

7 ビット・キャラクタ・セット, A-2  
8 ビット・キャラクタ・セット, A-3

## C

CD-ROM  
装置, 1-3, 1-4  
マウント, 3-4  
CLASSPATH 環境変数  
説明, 4-7  
coraenv スクリプト  
単一インスタンスのマシン, 4-9  
複数インスタンスのマシン, 4-9

## D

Oracle Database Configuration Assistant  
インストールの要件およびタスク, 1-10  
Data Migration Assistant  
インストールの要件およびタスク, 1-10  
Database Configuration Assistant  
設定前のデータベースの作成, 3-7  
DBA  
「管理者」を参照  
dba グループ  
Oracle Parallel Server 用に作成, 2-19  
DBCA  
「Oracle Database Configuration Assistant」を参照  
DISPLAY 環境変数  
説明, 2-16  
DRSYS 表領域  
Oracle *interMedia* データベース・オブジェクト,  
4-13

## G

GUI 要件, 1-5, 1-6, 1-7

## I

Identix 認証方式  
要件, 1-12  
init.ora ファイル  
パラメータの変更, 4-11  
Installer  
「Oracle Universal Installer」を参照, 1-10  
*interMedia*  
インストールの要件およびタスク, 1-8, 1-9  
ipcs コマンド  
共有メモリーの調査, 2-11, 2-13

## J

Java Runtime Environment  
JRE, 1-13

## K

Kerberos 認証方式  
要件, 1-12

## L

LD\_LIBRARY\_PATH 環境変数  
説明, 4-7  
listener.ora ファイル, 4-15

## M

Migration Utility, 1-14

## N

Names Server

インストール後のタスク, 4-16

Net8

Net8 Configuration Assistant, 2-21, 4-16

インストール後のタスク, 4-15

インストールの要件およびタスク, 1-11

インストール前のタスク, 2-21

NetWizard

「Net8」、「Net8 Configuration Assistant」を参照

NLS\_LANG 環境変数

説明, 2-17

## O

Object Type Translator

インストールの要件およびタスク, 1-10

ODMA

「Data Migration Assistant」を参照

OFA

「最適フレキシブル・アーキテクチャ」を参照

OPERATOR ロール, 2-14

ORA\_NLS 環境変数

説明, 2-17

Oracle Advanced Security

インストールの要件およびタスク, 1-11

認証方式のサポート, 1-12

Oracle Call Interface

インストールの要件およびタスク, 1-10

Oracle Connection Manager

インストールの要件およびタスク, 1-11

Oracle Information Navigator, 4-20

Oracle Intelligent Agent

インストールの要件およびタスク, 1-11

Oracle *interMedia*

DRSYS 表領域, 4-13

インストール後のタスク, 4-12

データ・ディクショナリ領域要件, 4-12

Oracle JDBC Drivers

インストールの要件およびタスク, 1-10

Oracle JServer

インストールの要件およびタスク, 1-10

Oracle Names

インストールの要件およびタスク, 1-11

Oracle Names Server

インストール前のタスク, 2-21

Oracle Parallel Server

dba グループを作成, 2-19

Oracle Parallel Server の再インストール, 3-7

ORACLE\_HOME 環境変数, 2-20

oracle ソフトウェア所有者の作成, 2-20

rcp コマンド, 2-20

インストール, 3-9

インストール後のタスク, 4-14

インストール前のタスク, 2-19

等価の設定, 2-20

ファイル権限, 2-20

Oracle Partitioning

インストールの要件およびタスク, 1-8, 1-9

Oracle Programmer

インストールの要件およびタスク, 1-8, 1-9

Oracle Server

インストール後のタスク, 4-13

インストールの要件およびタスク, 1-8, 1-9

オプション

設定タスク, 2-19

再起動, 4-4, 4-17

セキュリティ, 2-14

設定タスク, 2-19

停止, 4-4, 4-17

ロール, 2-14

Oracle SQLJ

インストールの要件およびタスク, 1-10

Oracle Universal Installer

インストールの要件およびタスク, 1-10

起動, 3-4

サイレント・インストール

「インストール」、「非問合せ」を参照

初回のインストール, 3-6

製品の削除, 3-8

レスポンス・ファイル, 3-9

エラー処理, 3-9

有効性のチェック, 3-10

レスポンス・ファイルの指定, 3-9

ORACLE\_BASE 環境変数

説明, 2-17, 4-8

要件, 2-4, 2-8, 2-10

ORACLE\_HOME 環境変数

oracle アカウントのホーム・ディレクトリ, 2-15

- Parallel Server, 2-20
- 説明, 4-8
- 要件, 1-13
- ORACLE\_SID 環境変数
- 説明, 4-8
- oracle アカウント
  - Oracle Parallel Server 要件, 2-20
  - インストール後のタスク, 4-7
  - インストール前のタスク, 2-16
  - 作成方法, 2-14
  - セキュリティ, 2-15
  - ホーム・ディレクトリ, 2-15
  - 要件, 2-14
- Oracle 製品
  - インストール前のタスク, 2-18
- oracle ソフトウェア所有者
  - 「oracle アカウント」を参照
- Oracle パッチ, 4-11
- Oracle プリコンパイラ
  - インストール後のタスク, 4-14
- oraenv スクリプト
  - 単一インスタンスのマシン, 4-9
  - 複数インスタンスのマシン, 4-9
- oratab ファイル
  - 作成, 2-15
  - インストール後のタスク, 4-10
- OSDBA グループ, 2-14
- OSOPER グループ, 2-14
- OUI
  - 「Oracle Universal Installer」を参照

## P

---

- PATH
  - 説明, 2-17
  - 要件, 2-17
- PATH 環境変数
- 説明, 4-8
- Pro\*C/C++
  - インストール後のタスク, 4-14
  - インストールの要件およびタスク, 1-10
  - インストール前のタスク, 2-21
  - 構成ファイル, 4-15
- Pro\*COBOL
  - インストール後のタスク, 4-15
  - インストールの要件およびタスク, 1-10
  - インストール前のタスク, 2-20

- 構成ファイル, 4-15
- Pro\*FORTRAN
  - インストールの要件およびタスク, 1-10

## R

---

- RADIUS 認証方式
  - 要件, 1-12
- RAW デバイス
  - 作成, 2-19
- Recovery Manager
  - 設定, 4-13
- root.sh スクリプト
  - 実行, 4-2
- root ユーザー
  - インストール後のタスク, 4-2
  - インストール前のタスク, 2-2

## S

---

- Secure Socket Layer
  - インストール後のタスク, 4-19
  - インストールの要件およびタスク, 1-11
  - 認証方式
    - 要件, 1-12
- SecurID 認証方式
  - 要件, 1-12
- SGA
  - 「システム・グローバル領域」を参照
- SQL\*Plus
  - インストールの要件およびタスク, 1-10
- sqlnet.ora ファイル, 4-15
- SSL
  - 「Secure Socket Layer」を参照

## T

---

- TCP/IP プロトコル
  - インストールの要件およびタスク, 1-11
  - 設定タスク, 2-22
- TMPDIR
  - 説明, 2-18
- tnsnames.ora ファイル, 4-15
- TWO\_TASK 環境変数
  - 設定, 4-19

## U

---

ulimit, 1-6

umask

設定, 2-16

要件, 2-4, 2-8, 2-10

UNIX アカウント

インストール後の更新, 4-8

作成方法, 2-14

要件, 2-4, 2-8, 2-10

UNIX カーネル

構成方法, 2-11

パラメータ設定, 2-11

UNIX 環境

要件, 2-2, 2-5

UNIX グループ, 2-14

作成方法, 2-14

要件, 2-3, 2-8, 2-10

## あ

---

アカウント

oracle アカウントの作成, 2-14

アップグレード, 1-13, 3-8

## い

---

移行, 3-8

バージョン7から, 1-14

インスタンス名

説明, 4-8

インストール

Oracle Universal Installer, 3-4

Oracle Universal Installer の使用, 3-6

インストール後のタスク, 4-1

インストール前のタスク, 2-1

概要, 1-2

カテゴリ, 3-2

初回インストール後の追加製品, 3-6

初回のインストール, 3-6

製品固有, 3-2

製品の再インストール, 3-7

非問合せ, 1-13, 3-9

レスポンス・ファイル, 3-9

要件

Data Migration Assistant, 1-10

interMedia, 1-8, 1-9

Net8, 1-11

Object Type Translator, 1-10

Oracle Advanced Security, 1-11

Oracle Call Interface, 1-10

Oracle Connection Manager, 1-11

Oracle Database Configuration Assistant, 1-10

Oracle Intelligent Agent, 1-11

Oracle JDBC Drivers, 1-10

Oracle JServer, 1-10

Oracle Names, 1-11

Oracle Parallel Server, 2-19

Oracle Partitioning, 1-8, 1-9

Oracle Programmer, 1-8, 1-9

Oracle SQLJ, 1-10

Oracle Universal Installer, 1-10

Pro\*C/C++, 1-10

Pro\*COBOL, 1-10

Pro\*FORTRAN, 1-10

Secure Socket Layer, 1-11

Server, 1-8, 1-9

SQL\*Plus, 1-10

TCP/IP プロトコル, 1-11

環境, 2-16

最適フレキシブル・アーキテクチャ, 1-14

製品固有, 1-8, 1-9

インストール後のタスク

Names Server, 4-16

Net8, 4-15

Oracle interMedia, 4-12

Oracle Parallel Server, 4-14

Oracle Server, 4-13

Oracle プリコンパイラ, 4-14

Pro\*C/C++, 4-14

root.sh の実行, 4-2

Secure Socket Layer, 4-19

製品固有, 4-12

インストール前のタスク

Net8, 2-21

Oracle Names Server, 2-21

Parallel Server, 2-19

Pro\*C/C++, 2-21

Pro\*COBOL, 2-20

RAW デバイス, 2-19

root ユーザー, 2-2

## お

---

### オプション

- インストールの要件およびタスク, 1-8, 1-9
- オペレーティング・システム
  - パッチ, 1-5, 1-6, 1-7
  - 要件, 1-5, 1-6, 1-7

## か

---

### カーネル

- パラメータ設定, 2-11

### 各国語サポート

- 言語, A-2
- サポートしているキャラクタ・セット, A-2
- ソート順, A-2
- 地域, A-2

### 環境

#### 環境変数

- 説明および設定, 4-7
- 要件, 2-2, 2-5
- 共通の環境の作成, 4-9
- 現行セッションの更新, 2-18
- 要件, 2-16

### 管理者

- UNIX アカウント, 2-4, 2-8, 2-10, 4-2
- UNIX グループ, 2-3, 2-8, 2-10
- ロール, 2-14

## き

---

### 既存の Names Server, 4-17

### キャラクタ・セット

- 7ビット, A-2
- 8ビット, A-3
- マルチバイト, A-4

### キャラクタ・モード

- 問題点および制限事項, 1-13

### 共有メモリー

- 構成, 2-11
- 最大値, 2-12

## く

---

### グループ

- Oracle Parallel Server 用に作成, 2-19
- UNIX グループ, 2-3, 2-8, 2-10

## け

---

### 権限

- umask による設定, 2-16
- ファイル作成, 2-4, 2-8, 2-10

## こ

---

### コマンド

- ipcs, 2-11, 2-13

## さ

---

### サイズが大きなファイル

- サポート, 1-14

### 最適フレキシブル・アーキテクチャ

- インストールの問題点および制限事項, 1-14
- 再リンク, 2-14

### サイレント・インストール

- 「インストール」、「非問合せ」を参照
- 参照マニュアル, vii

## し

---

### システム・グローバル領域

- init.ora ファイル, 4-11
- 共有メモリーの設定, 2-11
- システム要件, 1-2

## す

---

### スクリプト

- oraenv (coraenv), 4-9
- root.sh, 4-2

### スワップ領域

- 要件, 1-3

## せ

---

### 製品固有

- インストール, 3-2
- インストール後のタスク, 4-12
- 製品の再インストール, 3-7
- 製品の削除, 3-8
- セキュリティ, 2-14
- ファイルの検証, 4-2

## 設定タスク

- Oracle Server, 2-19
- TCP/IP プロトコル, 2-22
- オプション, 2-19
- カートリッジ, 2-19

## セマフォ

- 値の設定, 2-12

## そ

---

### ソフトウェア

- マウント・ポイント, 2-13
- 要件, 1-5

## て

---

### ディスク・ドライブ

- 要件, 1-3, 1-4

### データベース

- 起動, 4-4
- 作成, 3-7
- 停止, 4-4
- デモンストレーション・データベース, 1-14
- マウント・ポイント, 2-13

データベースの起動および停止の自動化, 4-4

## と

---

### ドキュメント

- アクセス, 4-19
- 位置, 4-19
- ナビゲーション・ファイル, 4-19
- 要件の表示, 1-7

## に

---

### 認証方式

- Identix, 1-12
- Kerberos, 1-12
- Oracle Advanced Security のサポート, 1-12
- RADIUS, 1-12
- Secure Socket Layer, 1-12
- SecurID, 1-12

## は

---

### パッチ

- Oracle, 4-11
- オペレーティング・システム, 1-5, 1-6, 1-7

### パラメータ

- init.ora ファイル, 4-11
- 初期化, 4-11

## ひ

---

非同期 I/O, 1-6

## ふ

---

### ファイル

- coraenv, 4-9
- init.ora の変更, 4-11
- listener.ora, 4-15
- Net8 構成, 4-15
- oraenv, 4-9
- oratab, 4-10
- root.sh, 4-2
- sqlnet.ora, 4-15
- tnsnames.ora, 4-15
- サイズが大きなファイルのサポート, 1-14
- 作成の権限, 2-4, 2-8, 2-10
- 作成の権限の設定, 2-16
- サポートしているファイル・システム, 1-14
- セキュリティ, 4-2
- レスポンス・ファイル, 3-9

### プリコンパイラ

- ソフトウェア要件, 1-10

分散ロック・マネージャ, 1-5

## ほ

---

ホーム・ディレクトリ, 2-15

## ま

---

### マウント・ポイント

- ネーミング規則, 2-13
- 要件, 2-3, 2-7, 2-10

マルチバイト・キャラクタ・セット, A-4



## め

---

メモリー  
要件, 1-3, 1-4

## も

---

問題点および制限事項  
ポート固有, 1-12

## ゆ

---

ユーザー等価  
確認, 2-20

## よ

---

要件  
GUI, 1-5, 1-6, 1-7  
ORACLE\_BASE 環境変数, 2-4, 2-8, 2-10  
oracle アカウント, 2-14  
UNIX アカウント, 2-4, 2-8, 2-10  
UNIX 環境, 2-2, 2-5  
UNIX グループ, 2-3, 2-8, 2-10  
オペレーティング・システム, 1-5, 1-6, 1-7  
システム・インストール, 1-2  
製品固有, 1-8, 1-9  
ソフトウェア, 1-5  
ディスク領域, 1-4  
ハードウェア, 1-2  
ファイル権限, 2-4, 2-8, 2-10  
マウント・ポイント, 2-3, 2-7, 2-10  
メモリー, 1-4

## り

---

リスナーの起動および停止の自動化, 4-17  
リモート・ログイン  
ユーザー等価, 2-20

## れ

---

レスポンス・ファイル  
エラー処理, 3-9  
有効性のチェック, 3-10

